

法住寺殿跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一六―三

法住寺殿跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1区 建物地業検出状況（北東から）



1 2区 全景（北西から）



2 隅木先蓋瓦 (58)

1 1区断割南壁(図13に対応)



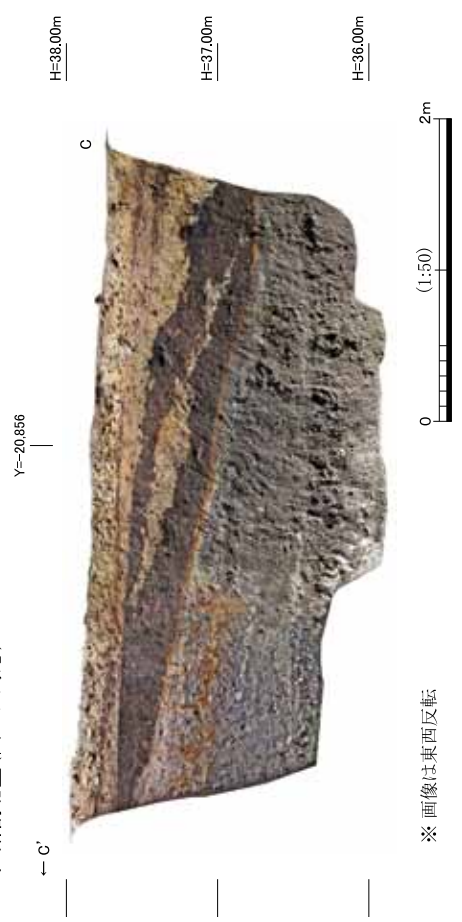
2 1区東西攪乱南壁(図14に対応)



1 2区南壁(図18に対応)



2 2区断割北壁(図20に対応)



※ 画像は東西反転

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建替工事に伴う法住寺殿跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

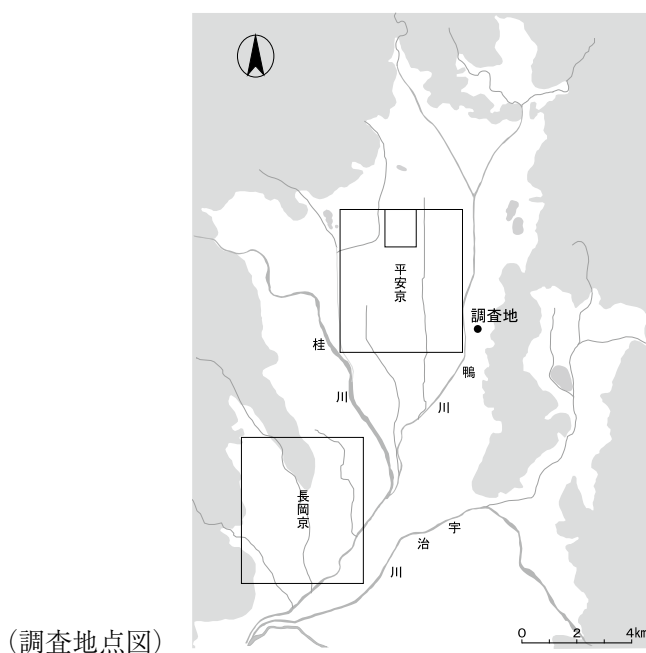
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年9月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 法住寺殿跡（文化財保護課番号 15 S 636） |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区三十三間堂廻り 642、647 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 妙法院 代表役員 菅原信海 |
| 4 調査期間 | 2016年4月4日～2016年5月27日 |
| 5 調査面積 | 252㎡ |
| 6 調査担当者 | 中谷正和・布川豊治・松本啓子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」「京都駅」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。1区の遺構番号は1番から、2区の遺構番号は200番台から付けた。そのため、遺構総数より大きな値の遺構番号が存在している。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 中谷正和・松本啓子 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 調査地の環境	3
(2) 既往の調査	6
3. 遺 構	13
(1) 基本層序	13
(2) 遺構の概要	14
(3) 1区の遺構	14
(4) 2区の遺構	24
4. 遺 物	30
(1) 遺物の概要	30
(2) 土器類	30
(3) 瓦類	34
(4) 土製品・銭貨	38
5. ま と め	40

図 版 目 次

巻頭図版 1	遺構	1区 建物地業検出状況（北東から）
巻頭図版 2	遺構・遺物	1 2区 全景（北西から） 2 隅木先蓋瓦（58）
巻頭図版 3	遺構	1区断割南壁・東西攪乱南壁オルソ画像（1：40）
巻頭図版 4	遺構	2区南壁・断割北壁オルソ画像（1：50）
図版 1	遺構	1 1区 全景（北から） 2 SD62・67、SA107（北から） 3 SK49（西から） 4 SA108：SP19（東から）

- 図版 2 遺構 1 1区 石列112・114（北東から）
 2 石列114断割断面（北東から）
 3 構築単位A東縁部検出状況（北東から）
- 図版 3 遺構 1 1区 建物地業断割南壁断面（北東から）
 2 1区 東西攪乱南壁 建物地業断面（北東から）
- 図版 4 遺構 1 2区 全景（西から）
 2 SA270：SP220（南から）
 3 SK214・215断面（南から）
 4 2区 南壁断面（北東から）
- 図版 5 遺物 1 1区出土土器類 1
 2 2区出土土器類
- 図版 6 遺物 1区出土土器類 2
- 図版 7 遺物 出土瓦類 1
- 図版 8 遺物 出土瓦類 2

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	1区調査前全景（北東から）	3
図4	2区調査前全景（南西から）	3
図5	2区作業風景	3
図6	土層剥ぎ取り作業風景	3
図7	周辺地質図（1：6,000）	4
図8	法住寺殿跡主要調査位置図（1：6,000）	7
図9	基本層序（柱状図）	13
図10	1区建物地業検出状況平面図（1：80）	15
図11	1区平面図（1：80）	16
図12	1区東壁断面図（1：50）	17
図13	1区断割南壁断面図（1：30）	18
図14	1区東西攪乱南壁断面図（1：30）	20
図15	1区地業断割実測図（1：50）	22
図16	1区SA107・108実測図（1：50）	23

図17	2区平面図（1：80）	25
図18	2区南壁断面図（1：50）	26
図19	2区東壁断面図（1：50）	27
図20	2区断割北壁断面図（1：50）	28
図21	2区SK214・215実測図（1：50）	28
図22	2区SA270・271実測図（1：50）	29
図23	1区出土土器実測図1（1：4）	31
図24	「楽」印銘（17）	31
図25	1区出土土器実測図2（1：4）	32
図26	内面の墨絵（31）	33
図27	高台内の墨書（32）	33
図28	2区出土土器実測図（1：4）	34
図29	出土瓦拓影及び実測図1（1：4）	35
図30	出土瓦拓影及び実測図2（1：4）	36
図31	出土土製品・銭貨拓影及び実測図（1：2、62のみ1：4）	38
図32	構築単位位置図（1：500）	40
図33	「蓮華王院三十三間堂」（部分）『都名所図会』	42

表 目 次

表1	法住寺殿跡主要調査一覧表	8
表2	遺構概要表	14
表3	遺物概要表	30

付 表 目 次

附表1	掲載土器一覧表	44
附表2	掲載瓦一覧表	45
附表3	掲載土製品一覧表	45

法住寺殿跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、三十三間堂本堂の北西隅に位置する参進閣の建替工事に先立ち、実施されたものである。調査地は、京都市東山区三十三間堂廻りに所在する蓮華王院三十三間堂内に位置する。発掘調査対象地は、『京都市遺跡地図』による法住寺殿跡にあたる。調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した結果、鎌倉時代の整地層が良好に遺存することを確認した。そのため、文化財保護課は工事計画主体である宗教法人妙法院に対して埋蔵文化財調査が必要であることを指導し、発掘調査が行われることとなった。調査は、文化財保護課の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。

(2) 調査経過

調査区は、文化財保護課の指導により、三十三間堂本堂の北に1区、西に2区を設定した。調査

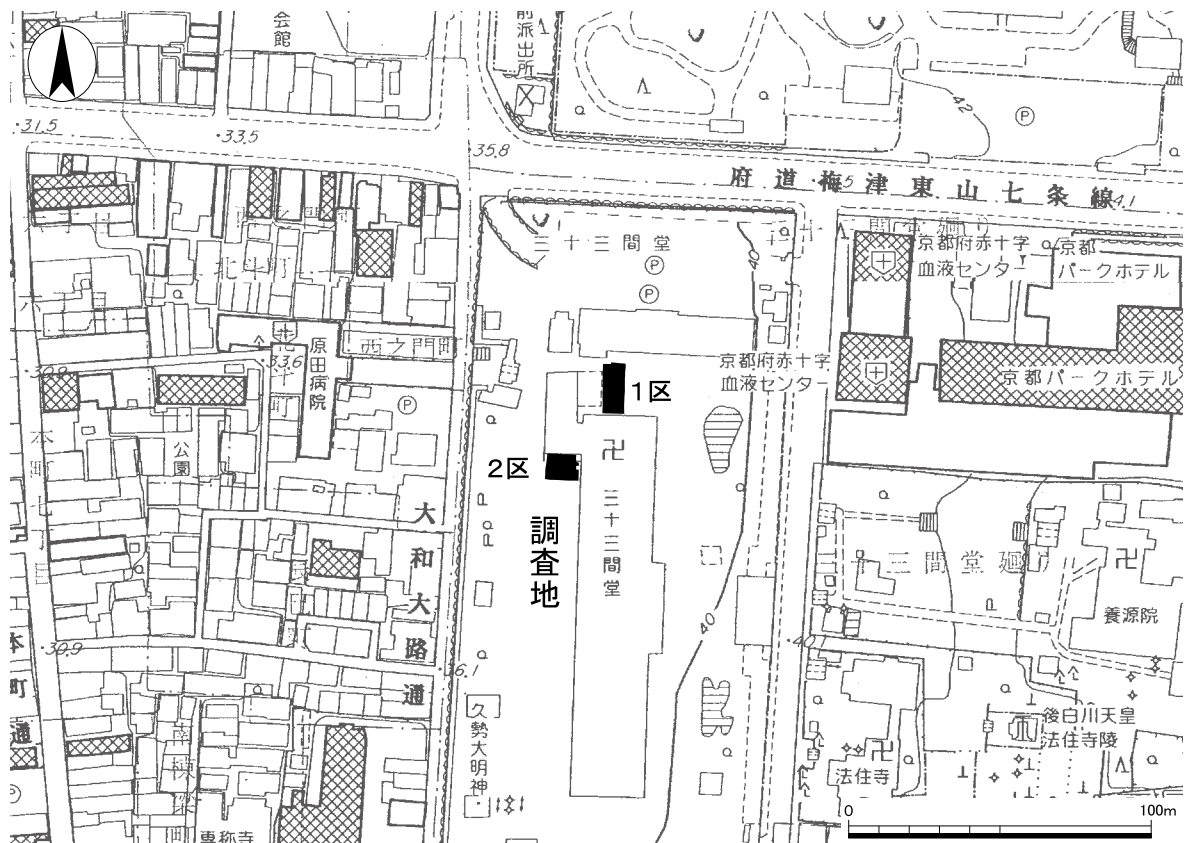


図1 調査位置図 (1:2,500)

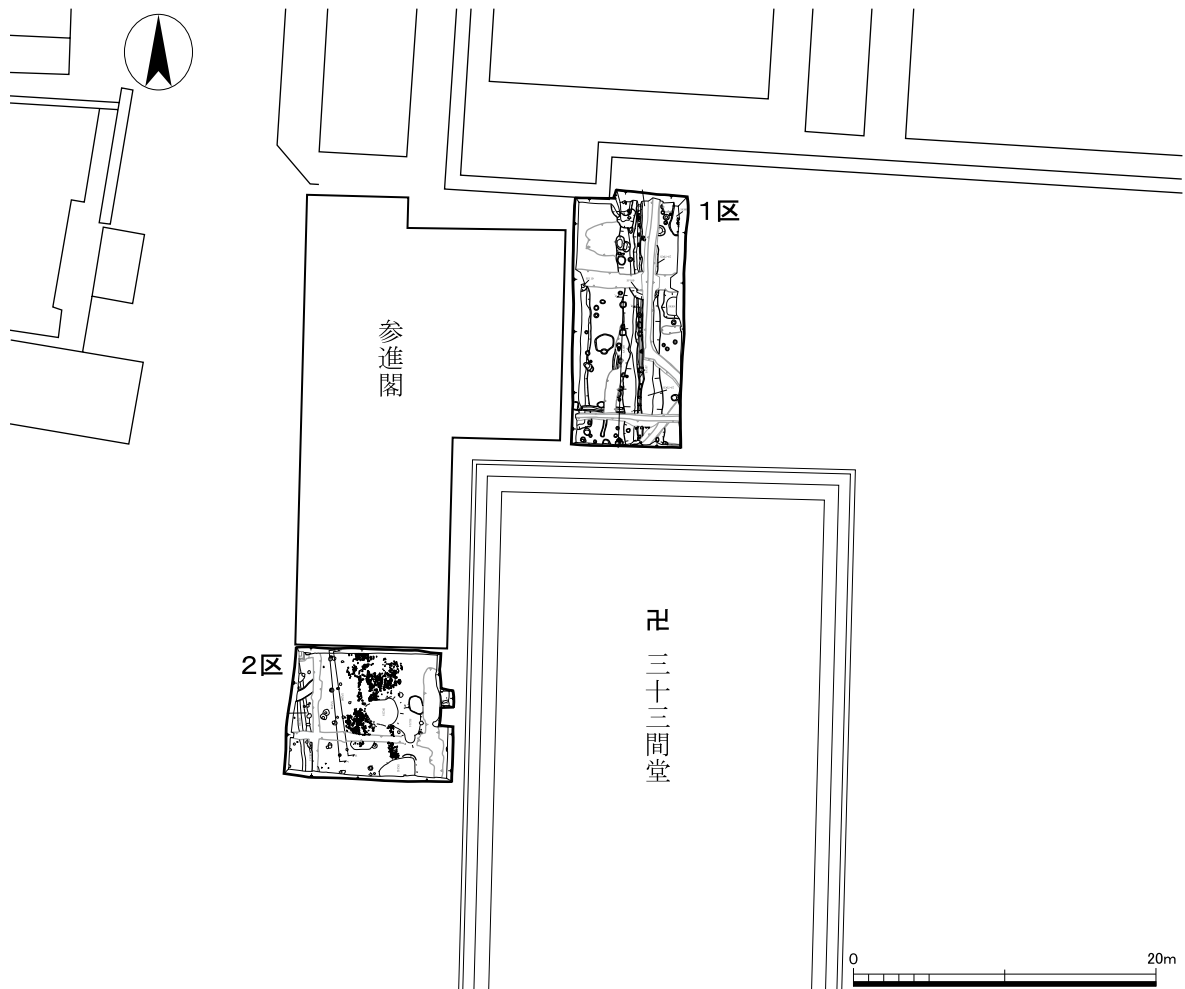


図2 調査区配置図（1：500）

面積は252㎡である。4月5日より重機による表土掘削を開始した。掘削土は基本的に調査区内に仮置きし、一部は場外に搬出処分した。

重機による表土掘削の後、鎌倉時代の整地層を確認した。調査は、この鎌倉時代の整地層上面を遺構検出面とし、まずはこれを切り込む江戸時代以降の素掘り溝や柱穴群を検出・掘削し、適宜、写真撮影や実測図を作成した。この過程において、鎌倉時代整地層が三十三間堂創建期の地業構築土であり、良好に残存していることが明らかになった。このため、文化財保護課と後の調査方針を協議し、検出面の調査終了後、地業構築土の断ち割り調査を実施した。断ち割り調査によって確認した土層断面や石組などの検出状況は、写真撮影・図面作製のほか、オルソ写真測量と一部土層剥ぎ取りにより記録した。調査は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。5月27日にすべての調査を終了し、撤収した。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳』 京都市文化市民局 2003年

2. 位置と環境

(1) 調査地の環境 (図7)

地理的環境 調査地が位置する東山区は、京都盆地の東縁辺部の鴨川左岸に位置する¹⁾。一帯は盆地の東縁辺部を南北に縦断する桃山断層などの断層運動により明瞭な地形境界が形成されており、それぞれ山地や丘陵、段丘、扇状地によって構成されている。

盆地の東を画する東山(比叡山地)は、主として丹波層群と呼ばれる中生代層からなり、基盤岩類の大部分はチャートや砂岩、頁岩などの堆積岩からなる。東山の盆地側には、起伏のゆるやかな丘陵が山地の麓に沿って南北に細長く分布している。丘陵部は新第三紀から第四紀にかけて堆積した大阪層群によって構成されており、地層は砂礫・砂・粘土などの互層からなる。丘陵部の西麓には段丘面や扇状地が形成されている。これらは河川の作用により堆積した未固結の礫・砂・泥など淡水生の堆積物により構成される。

東山一帯の地形環境の形成と大きく関わる桃山断層は、蹴上から桃山丘陵南端まで約10kmの間を南北走行する断層群を指す。この断層群では、幅0.5～1.0kmの間を、多数の断層が雁行もしくは並走することで一群の断層帯を形成しており、新規の変異地形は段丘面と低地との地形境界付近で発達している。ここの活断層群は、断層面を境にして両側の地盤が上下方向に動く縦ずれ断層で



図3 1区調査前全景(北東から)



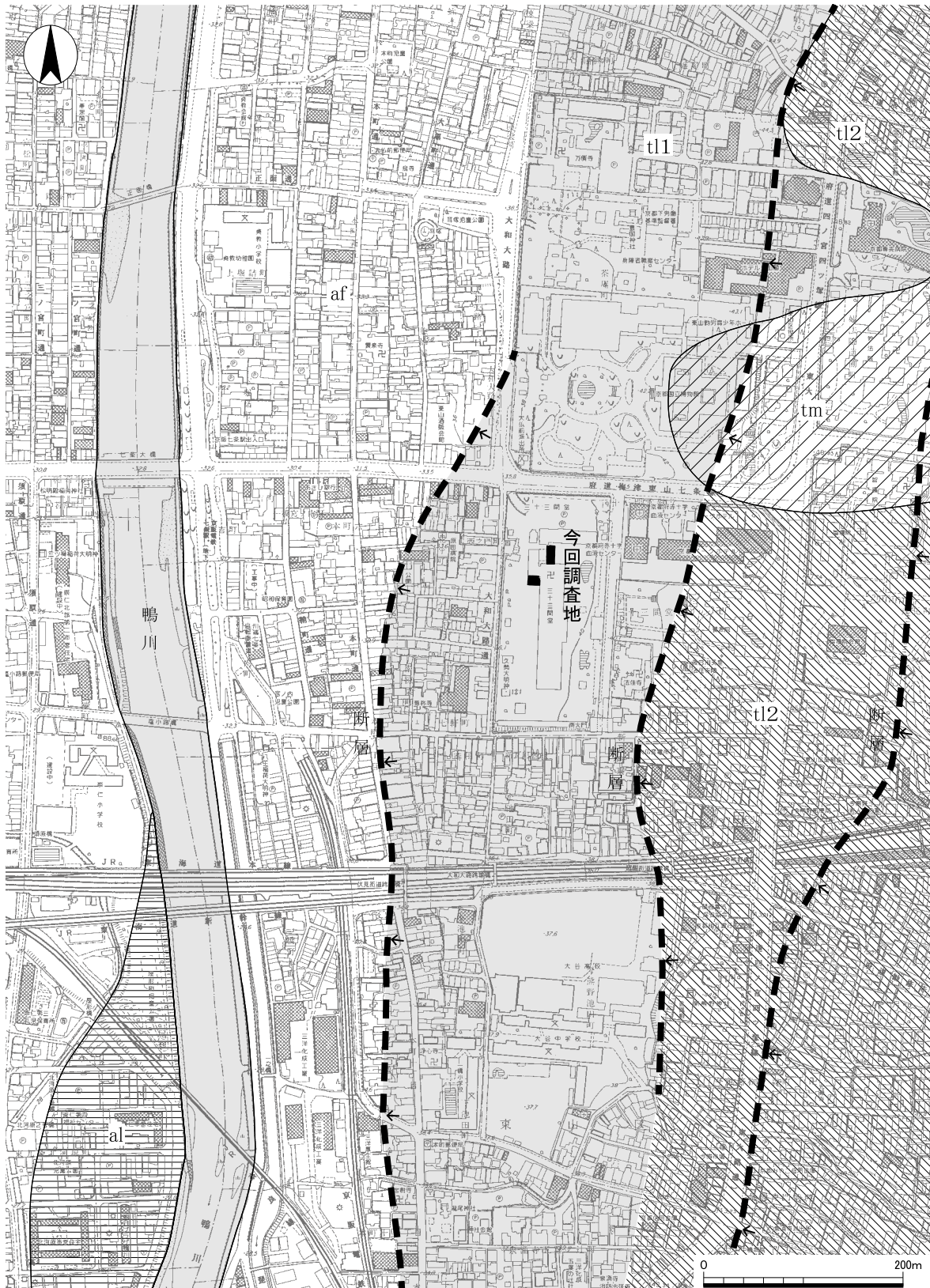
図4 2区調査前全景(南西から)



図5 2区作業風景



図6 土層剥ぎ取り作業風景



凡例

- | | |
|---|--|
| af 第四紀 完新世 沖積層 緩扇状地堆積物(礫及び砂) | t12 第四紀 後期更新世 低位 I 段丘堆積物(砂・礫及び泥) |
| al 第四紀 完新世 沖積層 自然堤防堆積物(砂・泥及び礫) | tm 第四紀 後期更新世 中位段丘堆積物(砂・礫及び泥) |
| t11 第四紀 完新世 低位 II 段丘堆積物(砂・礫及び泥) | |

地質調査総合センター発行 京都東南部5万分の1地質図幅及び植村2004を元に作図

図7 周辺地質図 (1:6,000)

あり、破断面は西上がりを呈している。

調査地の三十三間堂は、南北走行する桃山断層帯に挟まれた低位段丘上に立地し、第四紀完新世に堆積した砂や礫、泥などの堆積物を基盤層（地山）としている。

歴史的環境 調査地周辺では、これまでに弥生時代後期以降の遺構が確認されている。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、鴨川左岸段丘上の、東山から西側へ派生した尾根上に分布し、集落などが存在したと考えられる。また、飛鳥時代から奈良時代の遺構は、八坂地域から深草地域北部（十条通以北）に寺院や集落遺跡などが点在している。鴨川左岸には奈良から北白川方面に抜ける古代道路の存在が想定されており、これら遺構群との関連が指摘されている²⁾。

平安時代、鴨東地域は鳥辺野と呼ばれる葬送地であり、多数の堂塔が建立された³⁾。法住寺も、永延2年（988）に右大臣藤原為光が七条から八条末に建立した寺院である。『扶桑略記』によると本堂は釈迦堂で、東西に法華三昧堂・常行三昧堂を備えた寺院であったが、長元5年（1032）に焼失した。その後、平安時代後期に藤原信西（藤原通憲）が、この地域に邸宅を造営しており、久寿3年（1156）に後白河上皇が行幸している。

平治元年（1159）の平治の乱による藤原信西邸焼亡からほどなく、東山一带に法住寺殿や六波羅邸など、当時の政治的拠点となる諸施設が相次いで造営される。

法住寺殿は、後白河上皇が造営した院御所を中心に構成された、堂塔・神祠群の総称である。『山槐記』などの文献記事から、永暦2年（1161）頃には地割などと並行して造成事業が開始されたと推定されている⁴⁾。内部は、主に北殿（七条御所・七条殿）・南殿（法住寺御所・東山御所）・蓮華王院・最勝光院によって構成されていた。敷地規模は、七条末から八条末に至る南北約1.1km、東西約0.5kmにわたる。

法住寺殿の院御所は、公卿議定が開催されるなど実際に政務が執り行われ、京中の院御所と並ぶ政治的な拠点として機能した。しかし建久9年（1198）後鳥羽上皇の行幸以降は、政治的拠点としての機能が徐々に喪失し、承元3年（1209）の三条西殿（三条烏丸殿）の新造に際しては法住寺殿の舎屋が一部移築されている。そして正安3年（1301）の最勝光院焼亡以後、平安時代後期に造営された法住寺殿の建造物群は蓮華王院の一画を残すだけとなった。

その後、元弘3年（1333）に六波羅政庁が足利尊氏（高氏）の攻撃により焼亡するなど、調査地周辺は戦火に見舞われるが、蓮華王院の本堂（三十三間堂）は兵火を免れている。

天正14年（1586）、豊臣秀吉による方広寺造営にあたり、調査地周辺では大規模な土地造成が行われた。蓮華王院もその山内寺院として編入された。慶長20年（1615）の豊臣家滅亡後は、方広寺の管理が妙法院に移譲されるに伴い、蓮華王院の管理も同院に移行されている。

江戸時代になると、蓮華王院は通し矢の流行とともに、方広寺大仏殿と並ぶ東山の名所として、参詣者で賑わう様子が各種史料などで確認できる。しかし、方広寺は寛文2年（1662）の地震で大仏が損壊。さらに寛政10年（1798）落雷によって大仏殿が全焼している。

三十三間堂の沿革 蓮華王院は、後白河上皇の勅願により院御所の西側に建立された堂塔群である⁵⁾。その本堂（三十三間堂）の造営開始時期は不明であるが、『醍醐雑事記』巻9によると、長

寛2年（1164）12月17日に落慶供養が執り行われている。その後、建長元年（1249）正月に修造されるも、二箇月後の同年3月23日に焼失した。

焼失後の再建は比較的早く、建長3年（1251）には上棟式が行われている。しかし、千体仏造像のためか、落慶供養はそれより15年後の文永3年（1266）に行われた。再建後の本堂は、公家が毎年行う修正会の寺として、京中の寺院でも重要な位置を占めた。

南北朝期の動乱にあっても、本堂が直接戦火に見舞われることはなかった。しかし寺領からの収入などが激減したため、建物や千体仏の補修は実施されなかったが、永享5年（1433）になってようやく修造が始められた。この時の修理では、主に中央須弥壇周辺の補修と、瓦の一部葺き替えが行われたと考えられている。

天正14年（1586）の方広寺造営にあたって、蓮華王院もその山内寺院として編入された。その際、太閤塀敷設などの周辺整備とともに本堂も一部修築されたが、その内容は扉や金具の取り換えや外部の朱塗など外形的なものにとどまったと推測されている。

それに対して慶安2年（1649）からの修理では、本堂を悉皆解体した上で、基礎工事や建築部材の補修、瓦の葺き替えなど大規模な工事が行われた。とりわけ基礎工事では、建物を解体した後、床下全面に栗石と川砂利を厚く敷いた上に盛土で一尺嵩上げする工事を行ったほか、礎石を一部取り替えるなど根本的な改修が施された。本堂周辺の雨落溝は、この時に設置されたものである。

明治30年（1897）に三十三間堂は特別保護建造物として指定されている。昭和5年（1930）に国費より補助を受けての修造となり、傷みの激しい建築部材の補修や屋根葺きのほか、須弥壇の漆塗りなどが行われている。また南大門の修理工事も実施され、昭和10年（1935）に竣工した。

昭和11年（1936）、本堂中央本尊床下と同内陣仏壇裏で失火したものの、大事に至ることはなかった。その復旧のため昭和25年（1950）から国費より補助をうけて修造工事を実施した。あわせて太閤塀の修理も行われ、昭和26年（1951）竣工している。

（2）既往の調査（図8、表1）

京都国立博物館構内の調査では、弥生時代中期後半から明治時代にかけての遺構や遺物が確認でき、主に方広寺に関連する遺構を良好に検出している。調査（24）では弥生時代中期後半から後期前半の土器や、古墳時代の須恵器器台などが出土した。調査（23）では平安時代後期の溝や井戸・土坑・柱穴を検出している。法住寺殿との関連も想定できるが、遺構の分布密度は低い。方広寺造営に伴う地形の大規模改変などの影響も指摘されている⁶⁾。方広寺関連の遺構としては、南門（八脚門）と、それに取り付く回廊が検出されている。

豊国神社敷地内の調査（31）では、方広寺大仏殿の基壇を検出した。基壇は大きく削平されていたが、西面の地覆石抜取穴を検出した。

七条通大和大路北西側の調査（14）では、古墳時代の土坑や平安時代後期の井戸・柱穴・土坑、鎌倉時代の建物・塀・溝・井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝・井戸・土坑・柱穴を検出した。鎌倉時代の建物は東面する門で塀はこれに取り付くものである。

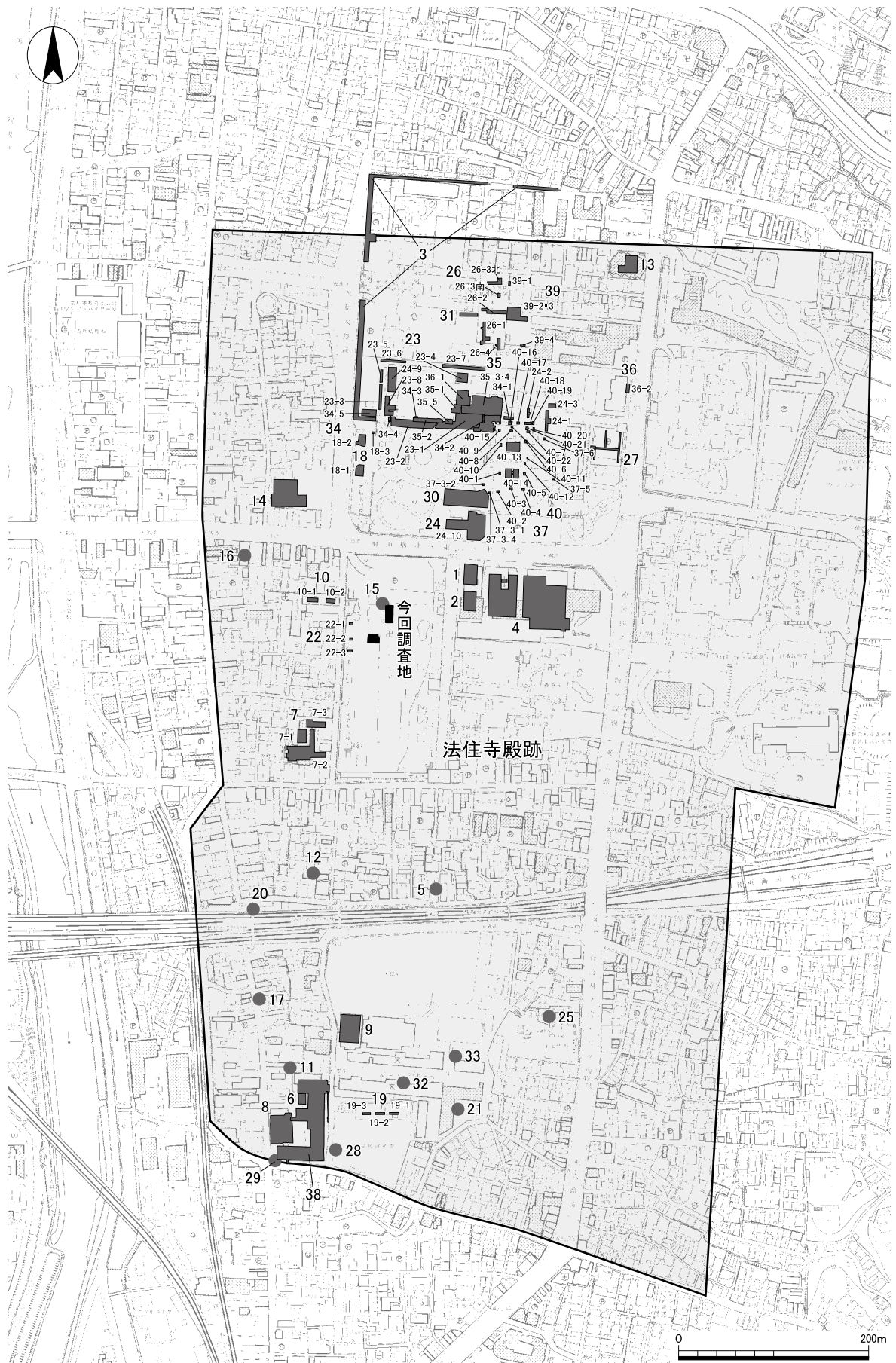


図8 法住寺殿跡主要調査位置図 (1:6,000)

表1 法住寺殿跡主要調査一覧表

No.	調査期間	方法	推定地	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
1	1965.11.05～12.16	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻り644(赤十字血液センター)	調査区南半部で平安時代後期の遺物包含層を検出し、上面は東側に向かってわずかに高くなる。上層では江戸時代の園池跡・建物跡などを検出。	平安時代後期の瓦類が遺物包含層から出土。	1
2	1976.12.01～1977.01.31	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻り(赤十字血液センター)	平安時代後期の遺構は未検出。全域で室町時代の遺物包含層を検出。上面で室町時代～江戸時代の建物・柵・石敷・土坑・溝などを検出。	平安時代後期の瓦類が遺物包含層などから出土。中世～江戸時代の土師器・陶器なども出土。	2
3	1978.03.22～03.31, 1982, 1983, 1984	発掘	法住寺北殿(方広寺)	東山区茶屋町527(京都国立博物館)	平安時代後期の遺構は未検出。桃山時代の方広寺西面石垣・築地を検出。	桃山時代の土器類・石仏などが大量に出土。	3
4	1978.07.20～11.20	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻り644-2(パークホテル)	調査区中央部で平安時代後期の南北溝を検出。中央南端で鎌倉時代の方形溝・甲冑を埋納した方形状土坑を検出。方形溝の内側は仏堂、土坑は墓と推定された。調査区北部で中世の井戸7基を検出。	平安時代後期～鎌倉時代の瓦が井戸から大量に出土。中世の土器類が井戸を中心として少量出土。	4
5	1980.01.12	立会	法住寺南殿	東山区上池田町34	地表下1.2m以下は地山。	なし。	5
6	1982.10.16～11.15	発掘	最勝光院	東山区本町十丁目東入下池田町527(一橋小学校)	全域で平安時代後期の建物基壇を検出、上面に轍跡がある。基壇下層で掘立柱建物を検出。	平安時代後期の土器類が基壇下層の遺物包含層を中心に出土。	6
7	1983.04.21～06.24	発掘	蓮華王院	東山区七軒町575	調査地東端部で平安時代後期の南北街路を検出。同時期の南北棟建物を調査地北部で1棟、中央部で1棟、西端部で1棟検出。いずれも上面が削平されるが、石組み雨落溝が廻る。建物はいずれも焼失する。全域で中世以降の遺構を検出。	平安時代後期の瓦類が側溝・後世遺物包含層から、土器類が建物雨落溝から少量出土。	7
8	1983.06.01～09.03	発掘	最勝光院	東山区本町十丁目東入下池田町527(一橋小学校)	調査区西側で平安時代後期の南北溝を検出、溝の西側は路面、東側は一段高まり、南北築地と推定された。築地推定地の下では石積み地業を検出。鎌倉時代の溝・井戸などを調査地北東部で検出。	平安時代後期の瓦類、環珞などが井戸から出土。	8
9	1983.07.19～11.03	発掘	最勝光院池田瓦窯	東山区今熊野池田町(大谷中・高等学校)	調査区北側で平安時代後期の園池南側汀線を検出。調査区南部で同時期の東西方向水路を検出。下層で平安時代中期の窯跡を検出。	平安時代後期の瓦類が瓦溜・園池などから大量に出土、水路・園池から土器類が出土。	9
10	1987.09.17～09.22	試掘	蓮華王院	東山区北斗町546-2(大和病院)	調査地東部で平安時代後期の南北街路(路面・西側溝)を検出。街路は調査7の続きと推定される。	平安時代後期の瓦類・土器類が側溝から少量出土。	10
11	1988.04.04～	立会	最勝光院	東山区本町十丁目162	掘削深-0.85m以下不明。	土師器小片。	11
12	1988.04.25	立会	法住寺南殿	東山区上池田町538	地表下1.4mで池状堆積土を検出。	なし。	12
13	1990.03.05～04.20	発掘	北東部	東山区馬町通妙法院北門前妙法院前側町424-1	調査区南東部で平安時代後期の井戸1基を検出。室町時代～江戸時代の遺物包含層などを全域で検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸から出土。	13
14	1990.06.02～08.23	発掘	法住寺北殿	東山区大和大路正面下大和大路二丁目543	調査区南東部で平安時代後期の井戸を1基、全域で柱穴・土坑を少数検出したが残存状況は悪い。調査区中央部で鎌倉時代の南北棟西門と南北両側に取り付く塀を検出。これらの西側と東側には同時期の溝がある。全域で中世以降の土坑などを検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸から少量出土。鎌倉時代～室町時代の土器が各遺構から大量に出土。	14
15	1990.11.28	試掘	蓮華王院	東山区三十三間堂廻り657, 642, 654	地表下1.5mで平安時代末期～鎌倉時代の池汀を検出。	平安時代後期～鎌倉時代の土器が出土。	15
16	1991.04.16～04.18	立会	蓮華王院	東山区本町六丁目3	平安時代後期の東西溝1条を検出。室町時代の柱穴・東西溝3条を検出。	平安時代後期の土師器・瓦が出土。室町時代の土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦が出土。	16
17	1992.06.17～08.11	立会	法住寺跡	東山区本町十一丁目地先	地表下0.18mで路面層を検出。	土師器小片、窯体片が出土。	17
18	1994.02.24～04.29	発掘	法住寺北殿	東山区茶屋町527(京都国立博物館)	調査区北端で平安時代後期の井戸を、全域で柱穴・土坑などを少数検出。全域で鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・柱穴を検出。全域で桃山時代～江戸時代の柵・柱穴・築地・土坑などを検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸などから少量出土。鎌倉時代の土器が土壇から大量に出土。	18
19	1996.11.11～11.16	試掘	法住寺南殿	東山区本町十丁目東入下池田町527(一橋小学校)	調査地東側で弥生時代～古墳時代の大形土坑を検出。西側で平安時代後期～鎌倉時代の掘込地業を検出。西端で鎌倉時代～室町時代の柱穴を検出。	土師器小片が出土。	19
20	1996.08.20～09.24	立会	法住寺南殿	東山区JR東海道線北側、本町通～東大路通	地表下0.94mで整地層を検出。	土師器皿が出土。	20
21	1996.11.11～12.02	立会	法住寺南殿	東山区今熊野池田町12(大谷高校)	地表下2.0mまで盛土。	土師器、須恵器が出土。	20
22	1997.09.24～09.27	試掘	蓮華王院	東山区三十三間堂廻り657, 654, 642	三十三間堂西隣で平安時代後期の地業を確認。大和大路沿いの境内西端で南北方向の太閤塀の痕跡を検出。	平安時代の須恵器・瓦が地業内から出土。桃山時代の瓦が多量出土。	21
23	1998.06.01～1999.03.31	発掘	法住寺北殿(方広寺)	東山区茶屋町527(京都国立博物館)	南側の調査区(2・1区)では、桃山時代の方広寺大仏殿南門とそれに取り付く東側回廊(復廊)を検出。門西側では回廊南側で石垣、南西部で梵鐘鑄造遺構を検出。北側の調査区(4・7区)では、平安時代後期の南北溝2条と間に石敷遺構を検出。全域で鎌倉時代～室町時代の溝・柱穴・土坑・井戸・石敷遺構などを検出。西側の調査区(8区)では、平安時代前期の埋納遺構・土坑、鎌倉時代～室町時代の南北道路と側溝・池状遺構などを検出。	平安時代後期の瓦類・土器類が4・7区溝などから少量出土。鎌倉時代～室町時代の土器・瓦類が溝・井戸・遺物包含層などから出土。桃山時代の瓦類・土器類・鑄造関係遺物が1・2区から大量に出土。	22

No.	調査期間	方法	推定地	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
24	1999.07.01～ 2000.03.24	発掘	法住寺北殿 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	南側の調査区(10区)では、平安時代前期の土坑、後期の東西溝1条を検出。全域で鎌倉時代の東西溝・南北溝・井戸・土坑・柱穴などを、室町時代の堀状遺構・溝・土坑・柱穴などを検出。桃山時代～江戸時代の南北道路と両側溝を2時期検出。北側の調査区(9区)では、鎌倉時代の南北溝、鎌倉時代～室町時代の建物・溝・柱穴・土坑などを検出。	平安時代後期の瓦類・土器類は溝・土坑から少量出土し、大半は後世遺構に混入。鎌倉時代の土器類は10区井戸・9区溝から出土。室町時代～江戸時代の土器・瓦類は遺構・整地層から出土。	23
25	1999.09.09～ 09.10	立会	新熊野神社	東山区今熊野柳ノ 森町15-1～4、42	時期不明の柱穴・土坑を検出。	土師器小片が出土。	24
26	2000.07.03～ 08.23	試掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町地内 (大仏殿緑地公園)	全域で桃山時代の方広寺大仏殿基壇を検出。大仏殿は西面南北棟で、中央に八角形須弥壇。	桃山時代の瓦類が全域から少量出土。	25
27	2000.07.03～ 08.23	発掘	東部	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	全域で平安時代～鎌倉時代の柱穴・土坑などを少数検出。全域で室町時代の遺物包含層・溝・土坑・柱穴を検出。全域で江戸時代の井戸・土坑・柱穴などを検出。	平安時代～鎌倉時代の土器類が少量出土。鎌倉時代～江戸時代の土器・瓦類が少量出土。	26
28	2000.01.25～ 02.07	立会	最勝光院	東山区本町十丁目 東入下池田町527 (一橋小学校)	地表下0.86mで江戸時代の遺物包含層を検出。	江戸時代の土器類・瓦類が出土。	27
29	2001.04.02～ 04.26	立会	観音寺大路	東山区本町十丁目 東入下池田町527 (一橋小学校)	地表下0.48mで時期不明の柱穴・落ち込みを検出。		28
30	2001.12.17～ 2002.03.12	立会	六波羅政庁	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	桃山時代～江戸時代の瓦溜め土坑を検出。	土師器・大型瓦が出土。	29
31	2002.07.22～ 08.09	発掘	北部 (方広寺)	東山区大和大路通 正面茶屋町 (豊国神社)	桃山時代の方広寺大仏殿基壇西辺を検出。	桃山時代の瓦類が全域から少量出土。	30
32	2006.07.07～ 07.11	立会	大池	東山区今熊野池田 町12	地表下0.82mで地山を確認。	なし。	31
33	2007.06.20～ 06.25	立会	大池	東山区今熊野池田 町12	地表下0.54mで地山を確認。	なし。	32
34	2008.02.12～ 03.25	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	室町時代の井戸を検出。桃山時代～江戸時代初めの方広寺南回廊基壇・礎石根固め跡・南雨落ち溝・石塁及び裏込め地業・東西柱穴列・地業盛土を検出。	室町時代の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・瓦などが出土。桃山時代～江戸時代初頭の大形巴文軒丸瓦・大仏瓦・桐文軒平瓦・羽口・石仏が出土。	33
35	2008.12.08～ 2009.03.31	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	室町時代の井戸・土坑を検出。桃山時代～江戸時代初めの南門礎石根石群・南門基壇北端地業・南回廊基礎根石群・南石塁裏込地業・水切溝・盛土整地層を検出。	室町時代の土師器・輸入陶器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦などが出土。桃山時代の土師器・施釉陶器・瓦質土器・瓦・鋳型・炉壁・銅銭などが出土。	34
36	2009.09.07～ 11.13	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	平安時代後期の門・路面・道路側溝を検出。鎌倉時代～室町時代の門・柱列・路面・溝・埋納遺構・土坑・堀を検出。桃山時代の石敷路面・整地層・土坑を検出。	平安時代の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦などが出土。鎌倉時代～室町時代中期の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・木製品・砥石・瓦などが出土。室町時代後期～桃山時代の土師器・輸入陶磁器・瓦質土器・焼締陶器・瓦・鉄製品などが出土。江戸時代後期～明治時代の染付・近世陶磁器・瓦などが出土。	35
37	2010.08.16～ 09.10	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	幕末～明治時代初頭?の整地層を検出。近代の旧本館基礎・整地層を確認。	幕末～明治時代初頭の土師器・陶磁器・染付・棧瓦などが出土。	35
38	2012.01.10～ 07.31	発掘	最勝光院	東山区本町十丁目 東入下池田町527 (元一橋小学校)	古墳時代前期の堅穴住居・溝・土坑を検出。奈良時代の掘立柱建物を検出。平安時代中期の土取り穴、後期の建物地業・土坑・柱穴・路面・道路側溝・濠を検出。鎌倉時代前期の井戸を検出。室町時代の路面・道路側溝・柱穴・土坑を検出。近世以降の柱列・井戸・土坑・溝などを検出。	弥生時代後期と古墳時代前期の土器類が出土。奈良時代の土器類が出土。平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・輸入磁器・瓦・金属製品・木製品などが出土。鎌倉時代～室町時代の土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・瓦類・金属製品などが出土。近世以降の土師器・近世陶磁器などが出土。	36
39	2013.10.01～ 2013.11.21	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町地内	大仏殿基壇下層で室町時代の土坑などを検出。桃山時代から江戸時代の大仏殿基壇や壺地業・柱穴・礎石抜き取り穴を検出。	室町時代の土師器皿が出土。桃山時代の瓦類が出土。江戸時代後半の土器類が出土。	37
40	2015.07.13～ 2016.03.29	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館)	桃山時代の方広寺大仏殿南回廊と、その雨落溝を検出。明治時代に建設された恭明宮の区画溝を検出。	桃山時代から江戸時代の瓦類が大量に出土。明治時代の陶磁器や瓦類は区画溝から出土。	38
41	2016.04.04～ 05.28	発掘	蓮華王院	東山区三十三間堂 廻り642、647	本調査。		本報告

日本赤十字社血液センター建設工事に伴う調査（1・2）では、江戸時代の建物・井戸・石敷・溝・柵などが検出されている。なお、この地点では室町時代前期以前の遺構を検出しておらず、以降の大規模な整地が推定されている。

京都パークホテル（現ホテル・ハイアットリージェンシー京都）の調査（4）では、甲冑をおさめた鎌倉時代の土坑や井戸などを検出した。また方広寺造営に関連すると考えられる製鉄遺構や溝、礫敷なども確認されている。

三十三間堂境内で実施した調査（22）では、敷地の西側で築地塀の基礎とそれと並行する溝を検出した。太閤塀と、その内溝と推定されている。調査（15）では地表下1.6mで時期不明の池状堆積を確認している。

北斗町の立会調査（10）では、平安時代後期の南北街路を検出した。

七軒町の調査（7）では、平安時代後期の建物3棟・溝・街路を検出した。建物の周囲には自然石を並べる雨落溝が巡る。蓮華王院の南小御所に関連する建物の可能性がある。

旧一橋小学校（現東山泉小学校）の調査（38）では、古墳時代前期から近世にかけての遺構や遺物を検出している。古墳時代前期の遺構は、竪穴住居10棟・溝・土坑などを検出した。それまで不明瞭であった、東山周辺における当該期集落の様相を考える上で貴重な資料を得た。奈良時代の遺構は、掘立柱建物5棟や敷地を区画する溝、土坑などを検出している。平安時代前期から中期の遺構は、法性寺大路に先行する南北道路と推定される路面や土取り穴群を検出した。後者は調査（9）で確認された池田瓦窯に関連する粘土採掘坑と想定されている。平安時代後期の遺構は石敷地業を検出した。法住寺殿の一面をなす最勝光院に関わるものと考えられている。

註

- 1) 地理的環境については、下記の文献を参考とした。
植村善博「変異地形と地下構造からみた京都盆地の活断層」『京都歴史災害研究』第2号 2004年
河村 愛・河村善也「京都で学ぶ世界遺産－教員養成大学・学部における地学野外実習改善の試み」『愛知教育大学研究報告』自然科学編第65輯 愛知教育大学 2016年
- 2) 小檜山一良「まとめ」『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012－10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 3) 杉山信三「法住寺殿とその御堂」『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
- 4) 上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要』第9号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 5) 三十三間堂の沿革については、下記の文献を参考とした。
村田治郎・杉山信三・後藤柴三郎「蓮華王院の建築」『三十三間堂』三十三間堂奉賛会 1961年
- 6) 網 伸也・山本雅和・田中利津子『京都国立博物館内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年

表1 法住寺殿跡主要調査一覧表 文献

- 1 『埋蔵文化財発掘調査概報1965－1967』京都府教育委員会 1967年

- 2 伊藤 潔「法住寺殿跡」『昭和51年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 3 『史跡方広寺石畳修復工事報告』 京都国立博物館 1987年
- 4 寺島孝一ほか『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯 古代學協会 1984年
- 5 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 6 久世康博・吉川義彦「法住寺殿跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 7 久世康博・上村和直「法住寺殿跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 8 平尾政幸・梅川光隆・辻 純一「法住寺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 9 杉山信三ほか『大谷中・高等学校構内遺跡発掘調査報告書』 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984年
- 10 久世康博「法住寺殿跡 (RT26)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年
- 11 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989年
- 12 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 13 高橋 潔「六波羅政庁跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 14 上村和直・西大條哲「六波羅政庁跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 15 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年
- 16 小松武彦「法住寺殿跡 (91RT6)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』 京都市文化観光局 1992年
- 17 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』 京都市文化観光局 1993年
- 18 鈴木廣司・山本雅和「六波羅政庁跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 19 小森俊寛「法住寺殿跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 20 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 21 網 伸也「法住寺殿跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 22 近藤知子・田中利津子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 23 近藤知子・田中利津子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 24 『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』 京都市文化市民局 2000年
- 25 近藤知子・田中利津子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年

- 26 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 27 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 28 『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
- 29 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 30 田中利津子「方広寺大仏殿」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 31 『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 32 『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 33 網 伸也・山本雅和・田中利津子『京都国立博物館内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 34 網 伸也ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 35 高橋 潔『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 36 小檜山一良・上村和直・津々池惣一『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012－10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 37 南 孝雄「方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 38 上村和直・山下大輝『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015－14 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図9)

調査地の層序は、大きく7層にまとめることができる。

I層は、現代盛土である。砂礫混じりの褐灰色砂泥と黄褐色粘土で構成される。1区上面は、2区上面よりも0.25m程度標高が高い。

II層は、黒褐色泥砂層である。1・2区のII層上面に標高差はほとんど認められない。江戸時代の瓦・陶磁器類が出土する。

III層は、褐色砂泥層である。1・2区のIII層上面に標高差はほとんど認められない。鎌倉時代の遺物が出土した。

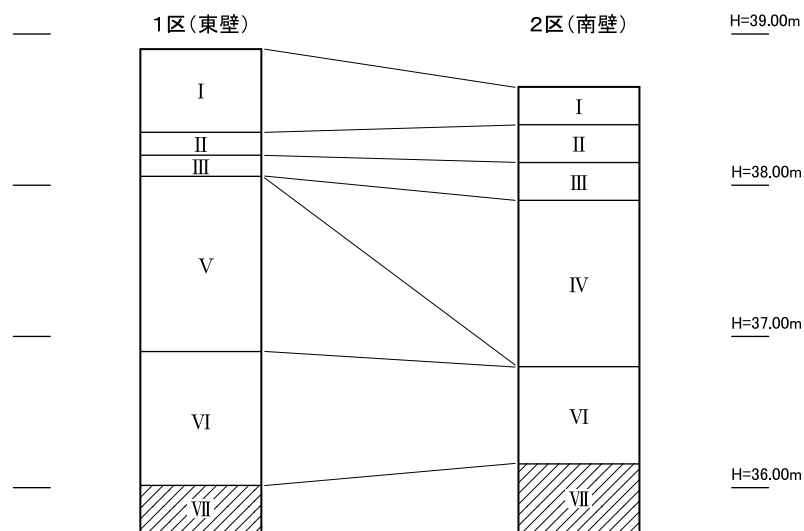
IV層は、2区で確認した三十三間堂創建期の土地造成土である。2区IV層上面と1区V層上面の標高差は、0.15m程度である。縄文時代から平安時代後期までの遺物を含む。

V層は、1区で確認した三十三間堂創建期の建物地業構築土である。縄文時代から平安時代後期までの遺物を含む。

VI層は、三十三間堂創建期の建物地業・土地造成前整地層である。平安時代の遺物を含む。1・2区のVI層上面に標高差はほとんど認められない。

VII層は、灰色砂泥の基盤層(地山)である。

なお、調査終了後に文化財保護課が実施した参進閣建て替えに伴う立会調査で、V層がIV層に先行する層序を実地で確認することができた。



I層：現代盛土	10YR6/1 褐灰色砂泥 微砂を多く含む + 2.5Y6/6 黄褐色粘土
II層：江戸時代整地層	2.5Y3/1 黒褐色砂泥 細砂・粗砂を多く含む 江戸時代の陶磁器・瓦類が混じる
III層：鎌倉時代整地層	10YR4/4 褐色砂泥 鎌倉時代の土師器片・炭が混じる
IV層：土地造成土	縄文時代から平安時代後期の遺物が混じる
V層：建物地業構築土	縄文時代から平安時代後期の遺物が混じる
VI層：建物地業・土地造成前整地層	平安時代の遺物が混じる
VII層：基盤層(地山)	5Y5/1 灰色砂泥

図9 基本層序(柱状図)

(2) 遺構の概要 (表2)

平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代の遺構を確認した。総数は178基である。遺構の多くは江戸時代のものである。

平安時代後期の遺構は、1区で三十三間堂創建期の建物地業を検出し、2区では盛土による土地造成を確認した。構築土内からは、造営の工程を示す構築単位を複数確認している。

鎌倉時代の遺構は、2区で大型土坑を3基検出した。いずれも本堂西側の軒先に沿うように掘削されている。土坑からは、大量の瓦類とともに炭や焼土も出土した。1区では同時期の柱穴や土坑などは確認できなかった。また、この時期の整地層と考えられるⅢ層を両調査区で確認した。

江戸時代の遺構は、柵や溝、土坑などを確認した。柵や溝などの区画施設は、両調査区で検出した。

(3) 1区の遺構 (図11、図版1)

1) 平安時代後期

建物地業 (図10・13～15、巻頭図版1・3、図版2・3) 調査区全域で確認した。整地層 (Ⅵ層) の上に構築されている。厚さ約1.3mを測る。

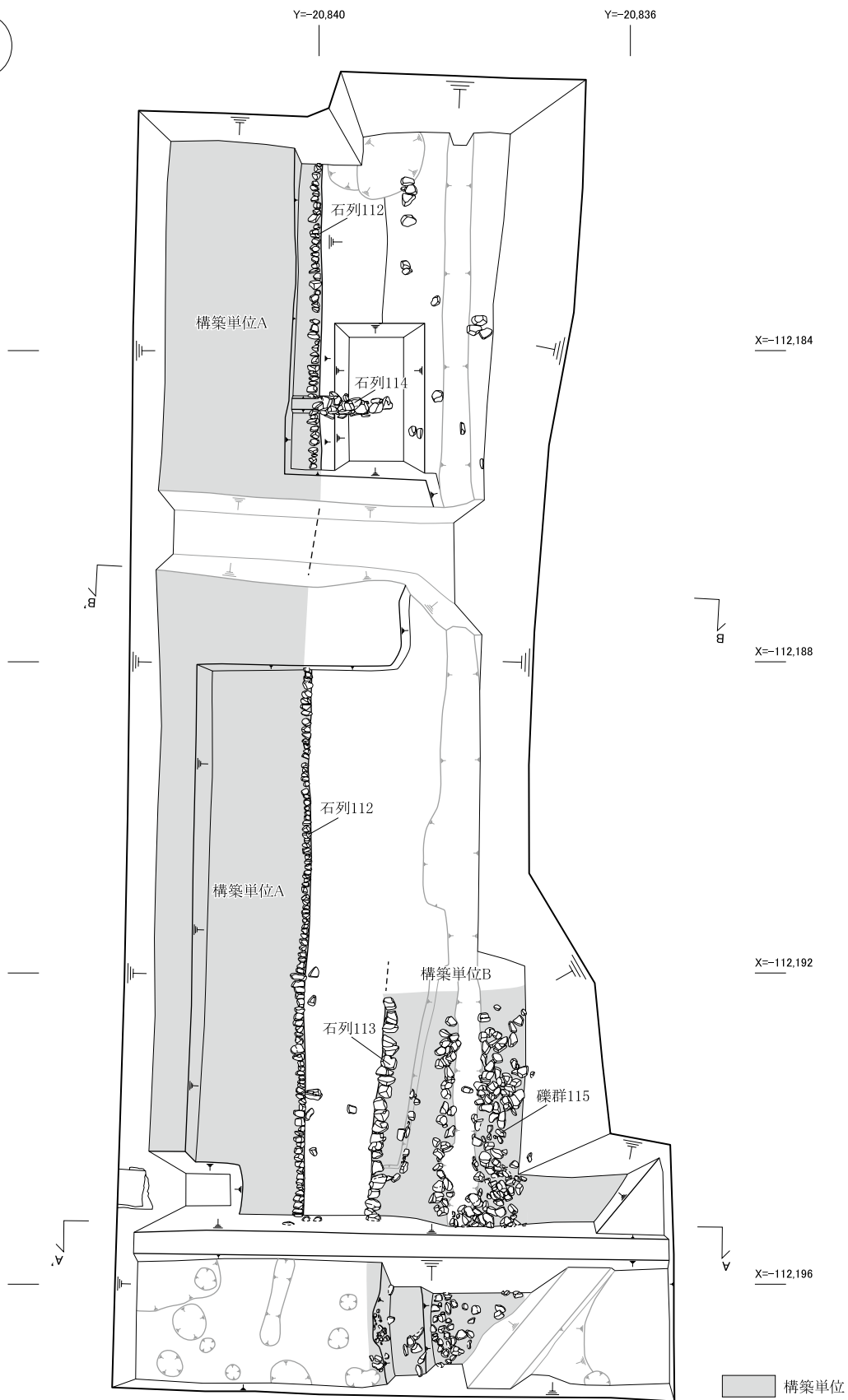
調査区西側と中央の2箇所で、南北に主軸を持つ畝状の構築単位を検出した (図10、巻頭図版1)。調査区西側に位置する構築単位Aの規模は、南北13.8m以上・東西2.1m以上・厚さ約1.2mを測る。北側・南側は調査区外に伸びている。南側は三十三間堂の西側柱列まで延長する可能性が高い。調査区中央部に位置する構築単位Bは、南北5.0m以上・東西3.3m・厚さ約1.2mを確認したが、X=-112,192地点以北は西縁部の構造が不明瞭である。

構築単位Aの東縁部では石列112を検出した。石列を構成する礫は、径0.1～0.2mを測る。礫の長軸を東西方向にして小口積みしながら、南北方向に一列に配列している。東側小口は面を揃えるが、西側小口は不揃いである。石列は北で東に1°05'傾く。構築単位Bの西縁部では、石列113を検出した。径0.2～0.4mの礫を南北方向に配列している。石列の東側小口は不揃いであるが、西側小口は面を揃える。石列は北で東に5°12'傾く。

構築単位Aの東縁部と、構築単位Bの西縁部では、特に丁寧な版築の積み土が認められた (図13・14-a～c層)。この部分は、灰色泥砂と、各石列を構成する礫、精良な赤褐色粘土の互層で

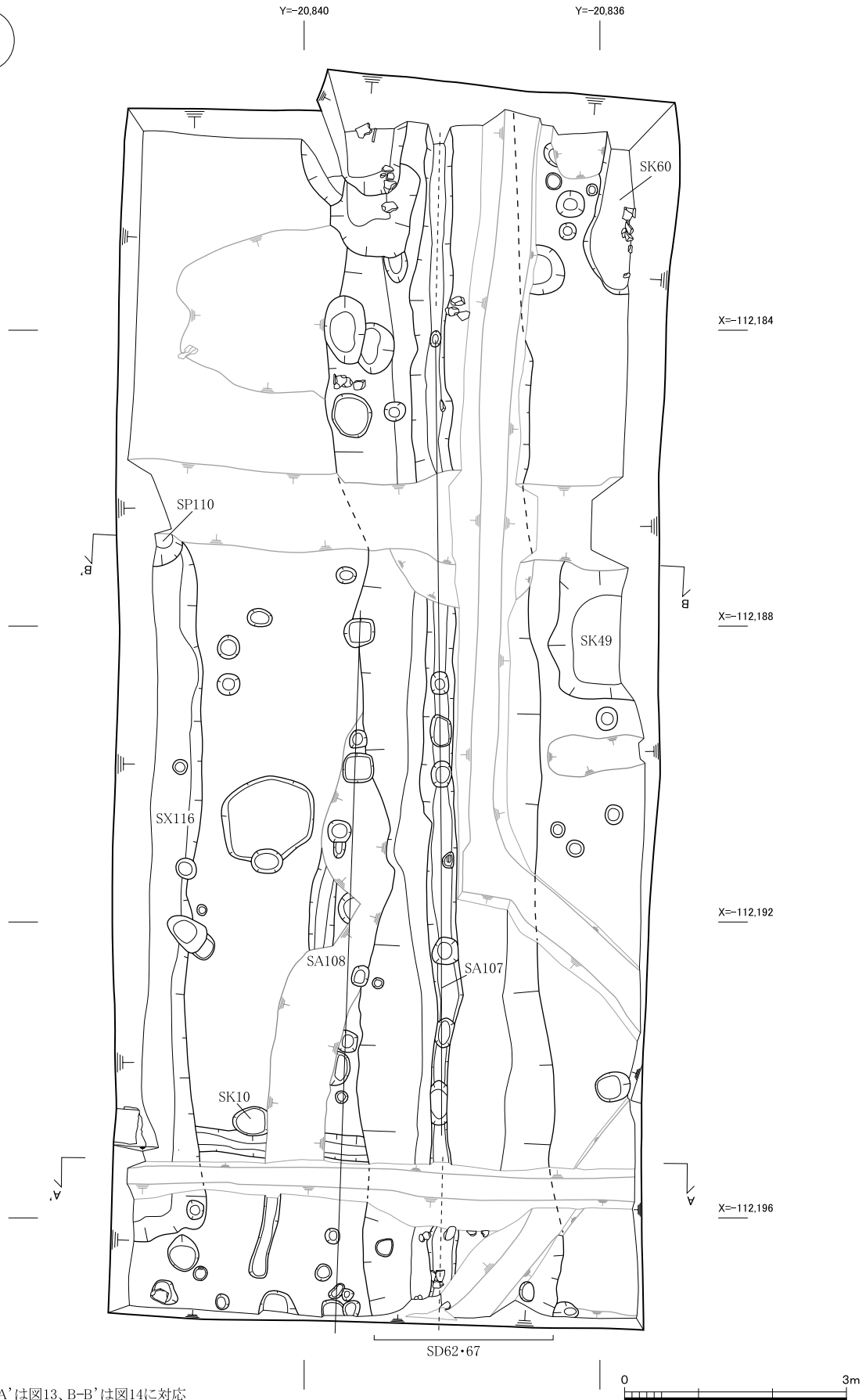
表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代後期	建物地業、土地造成	
鎌倉時代	SK214・215・242	
江戸時代	SA107・108・270・271、SP110、SD62・67・240・241、SK10・49・60、SX116	



※ A-A'は図13、B-B'は図14に対応

図10 1区建物地業検出状況平面図 (1:80)



※ A-A'は図13、B-B'は図14に対応

図11 1区平面図 (1 : 80)

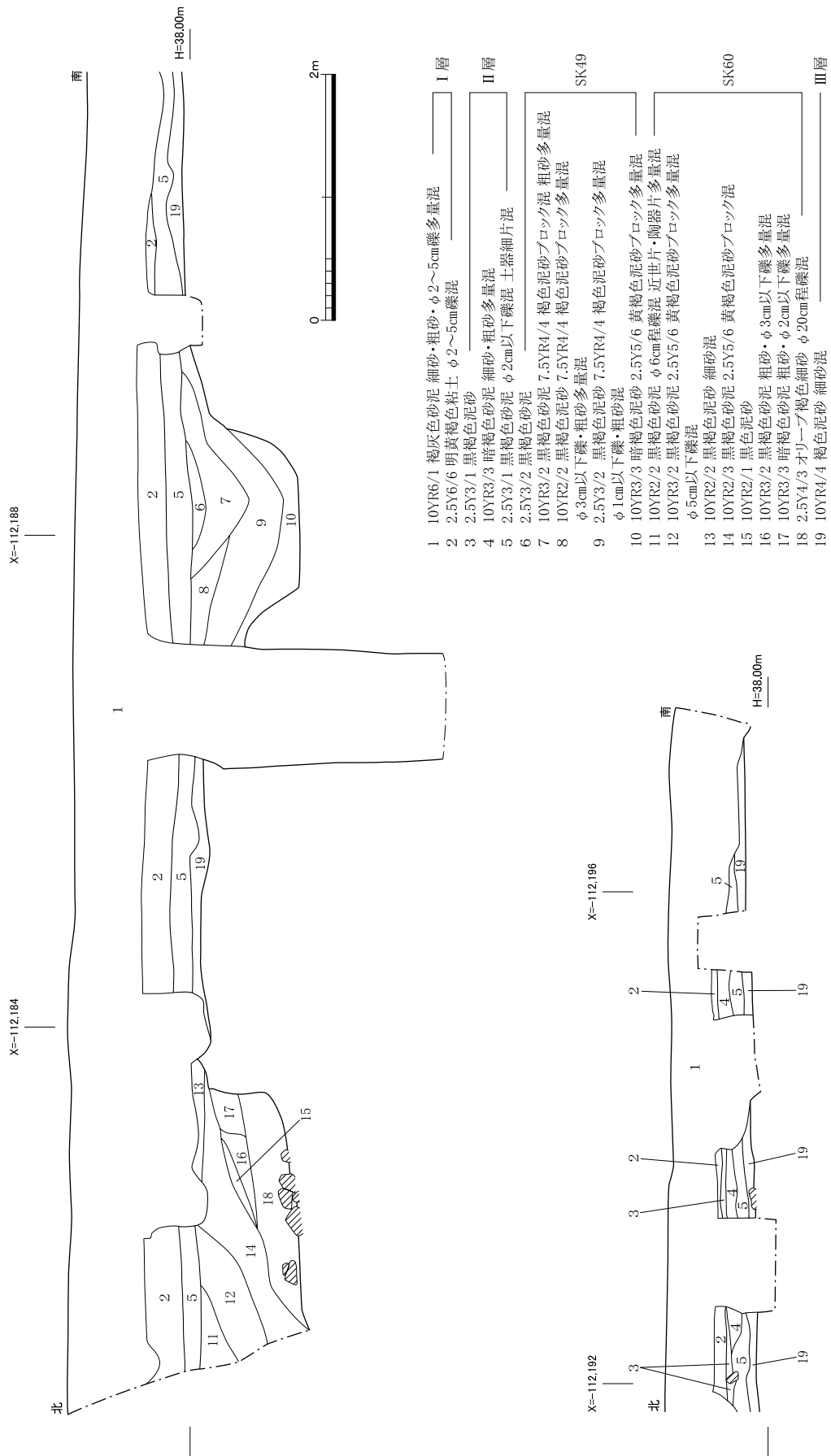
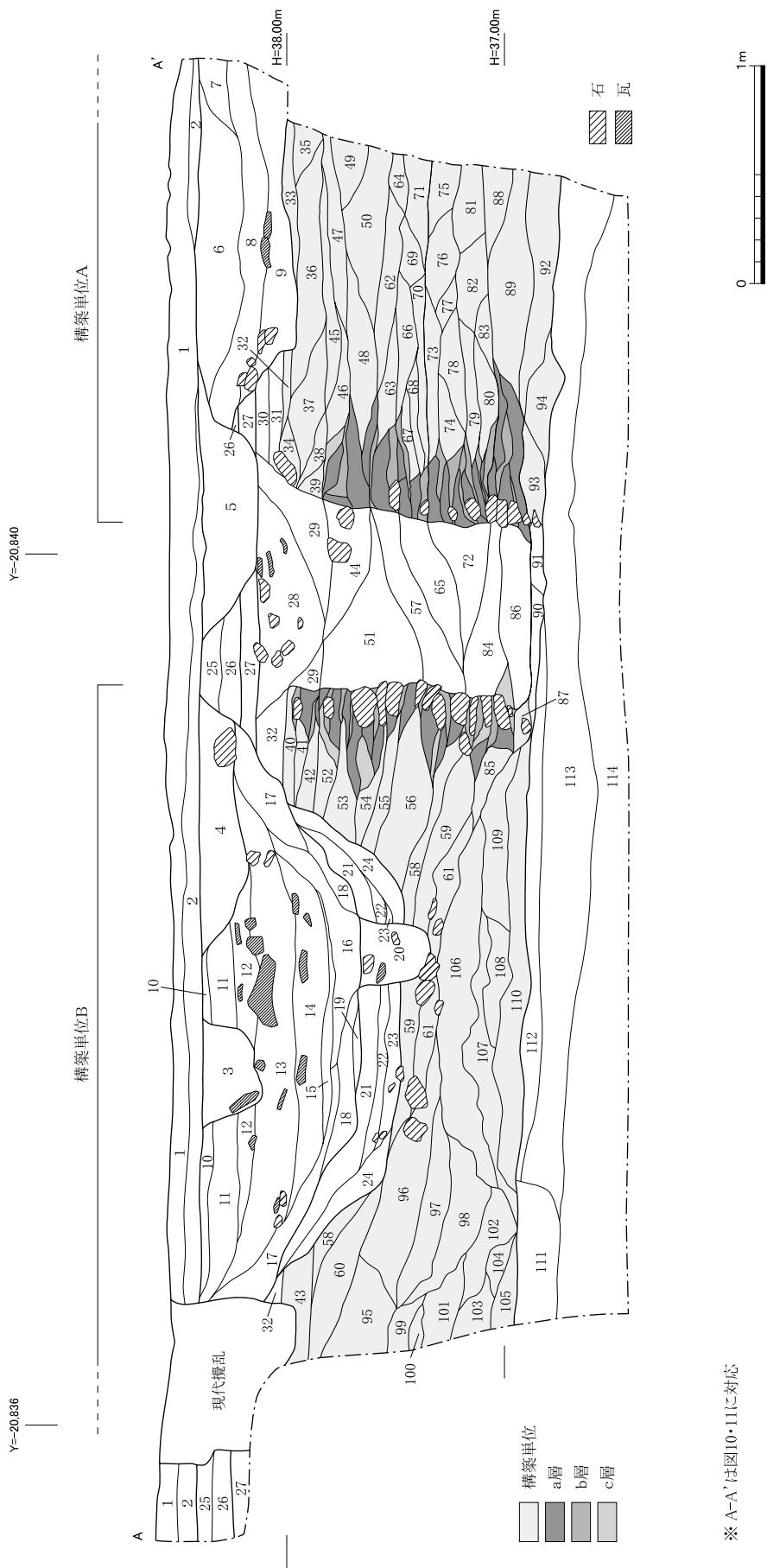


図12 1区東壁断面図 (1:50)



※ A-A'は図10-11に対応

図13 1区断割南壁断面図 (1:30)

1	2.5Y6/6 明黄褐色粘土 φ2~3cmの礫混	
2	10YR3/3 暗褐色砂泥 細砂・粗砂多量混	
3	10YR4/1 褐灰色砂泥 φ5cm以下の礫混 近世互混	
4	10YR3/1 黒褐色砂泥 φ3cm以下の礫多量混 近世陶器片混	
5	10YR2/2 黒褐色砂泥 φ5cm以下の礫混 近世陶器片混 縮まり無	
6	10YR3/3 暗褐色砂泥 粗・細砂混	
7	10YR3/4 褐色砂泥 粗砂混	
8	2.5Y8/2 灰白色泥砂 瓦片多量混 粘性有	
9	2.5Y4/1 黄灰色泥砂 粗砂混	
10	2.5Y5/1 黄灰色泥砂	
11	10YR4/2 灰黄褐色泥砂	
12	2.5Y8/2 灰白色泥砂 瓦片多量混 粘性有	
13	10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂 粗砂多量混	
14	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 シルト混 瓦片混 粘性有	
15	10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 シルト混 縮まり無し 粘性無	
16	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 シルト混 炭混 粘性有	
17	10YR3/3 暗褐色粗砂 炭混 粘性無	
18	10YR3/3 暗褐色粗砂 炭混 粘性無	
19	10YR3/3 暗褐色粗砂 縮まり無し 粘性無	
20	10YR3/2 黒褐色砂泥 シルト混 炭混	
21	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 アロク混	
22	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 シルト・細砂混 炭多量混 粘性有	
23	10YR5/4 にぶい黄褐色細砂・シルト混 炭多量混 縮まり無	
24	10YR5/6 黄褐色砂泥 炭混	
25	10YR3/3 黒褐色砂泥 粗砂・粗砂多量混	
26	10YR3/4 暗褐色泥砂 粗砂・φ8cm以下の礫多量混	
27	10YR4/4 褐色泥砂 細砂混	
28	10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 粗砂多量混 瓦・土師器小片混	
29	10YR4/4 褐色泥砂 粗砂多量混 φ3cm以下の礫混	
30	10YR6/6 明黄褐色砂泥 細砂混 縮まり有	
31	10YR5/6 黄褐色砂泥 細・粗砂混	
32	10YR4/4 褐色泥砂 粗砂・φ1cm以下の礫混 縮まり有	
33	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂	
34	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粘性有	
35	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 粗砂・φ1cm以下の礫混	
36	土師器小片混 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 粗砂・φ5cm以下の礫少量混	
37	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
38	10YR3/3 暗褐色砂泥 粘性有	
39	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂・φ3cm以下の礫混 縮まり有	
40	10YR4/4 褐色砂泥 粗砂・φ1cm以下の礫混	
41	10YR4/6 褐色泥砂 粘性有	
42	10YR4/4 褐色泥砂 粗砂混	
43	10YR6/6 明黄褐色砂泥 粗砂混	
44	10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 細砂混	
45	7.5YR6/8 橙褐色泥砂 アロク少量混	
45	10YR5/1 褐灰色泥砂 縮まり有 粘性有	

46	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 土師器小片混	
47	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
47	10YR4/4 褐灰色泥砂 土師器小片混	
48	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
48	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 粗砂・φ3cm以下の礫混 土師器小片混	
49	10YR4/2 灰黄褐色泥砂	
50	10YR4/1 褐灰色泥砂 粘性有	
51	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 粘性有	
51	7.5YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混	
52	7.5YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混	
53	10YR6/6 明黄褐色泥砂 粗砂混	
54	10YR5/6 黄褐色泥砂 縮まり有	
55	10YR5/6 黄褐色泥砂 7.5YR6/8 橙褐色泥砂 アロク混	
56	10YR4/4 褐色泥砂 粗砂混 7.5YR2/3 極暗褐色泥砂 アロク混	
57	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 細砂多量混	
58	10YR3/2 黒褐色泥砂 粘性有	
59	10YR4/6 褐色泥砂 粘性有	
60	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 細・粗砂多量混	
61	φ5cm以下の礫混 縮まり無 粘性無	
61	2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 縮まり無 粘性無	
62	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
63	10YR4/1 褐灰色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
64	2.5Y4/1 黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
65	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 細砂多量混	
66	2.5Y6/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
66	2.5Y4/1 黄灰色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
67	7.5YR4/4 褐色泥砂 縮まり有 粘性有	
68	10YR4/1 褐灰色泥砂 縮まり有 粘性有	
69	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 縮まり有 粘性有	
69	2.5Y4/8 暗灰黄色泥砂 縮まり有 粘性有	
70	5Y4/1 灰白色泥砂 縮まり有 粘性有	
71	10YR4/1 褐灰色泥砂	
72	10YR4/4 褐色泥砂 2.5Y6/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
73	10YR4/1 褐灰色泥砂 縮まり有	
74	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
74	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
75	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂	
76	2.5Y3/2 黒褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
77	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク混	
78	2.5Y3/2 暗褐色泥砂	
79	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 縮まり有 粘性有	
80	2.5Y4/1 黄灰色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂 アロク少量混	
81	2.5Y3/2 暗褐色泥砂 2.5Y5/4 黄褐色泥砂 アロク混	
82	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 2.5Y5/4 黄褐色泥砂 アロク混	
83	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 2.5Y5/4 黄褐色泥砂 アロク混	
84	7.5YR2/3 極暗褐色泥砂 細砂・粗砂多量混	
85	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粘性有	
86	7.5YR2/2 黒褐色泥砂 粗砂多量混 粘性有	

87	2.5Y4/1 黄灰色泥砂 粘性有	
88	10YR3/3 暗褐色泥砂 縮まり有 粘性有	
89	10YR4/1 褐灰色泥砂 粘性有 10YR5/6 黄褐色泥砂 アロク混	
90	N2 黒色泥砂	
91	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色泥砂 シルト混 粘性有 土師器小片混	
92	7.5Y4/1 灰白色泥砂 シルト混	
92	5B6/1 青灰色泥砂 アロク混	
93	N3 暗灰色泥砂 粘性有	
94	2.5Y3/1 黒褐色泥砂 シルト混 粘性有 土師器小片混	
95	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 10YR4/8 明黄褐色泥砂 アロク混	
96	10YR4/4 褐色砂泥 細砂・粗砂混 10YR4/4 褐色泥砂 アロク混	
97	2.5Y6/6 明黄褐色泥砂 粘性有	
98	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂	
99	2.5Y4/2 明灰黄色泥砂	
100	10YR7/8 黄褐色泥砂 粘性有	
101	10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混 粘性有	
101	10YR4/8 明黄褐色泥砂 アロク混	
102	10YR2/3 黒褐色砂泥	
103	10YR5/8 黄褐色泥砂	
104	10YR5/2 灰黄褐色細砂 縮まり無 粘性無	
105	10YR4/1 褐灰色泥砂 縮まり無し 粘性有	
105	10YR6/4 にぶい黄褐色泥砂 アロク混	
106	10YR5/8 黄褐色泥砂 粘性有	
107	7.5YR3/1 黒褐色泥砂 粘性有	
108	2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 縮まり無 粘性無	
109	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 細砂多量混 粘性無	
110	2.5Y4/1 黄灰色細砂 縮まり無 粘性無	
111	5GY2/1 黒色砂泥 粗砂多量混 粘性有	
112	2.5Y2/1 黒色泥砂 シルト混 縮まり有	
113	10YR3/1 黒褐色泥砂 シルト混 土師器小片混 粘性有	
114	2.5Y3/1 黒褐色泥砂 シルト混 土師器小片混 縮まり有 粘性有	
a	5YR3/4 暗赤褐色粘土 縮まり強	
b	2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 縮まり強	
c	2.5Y8/6 黄色泥砂	

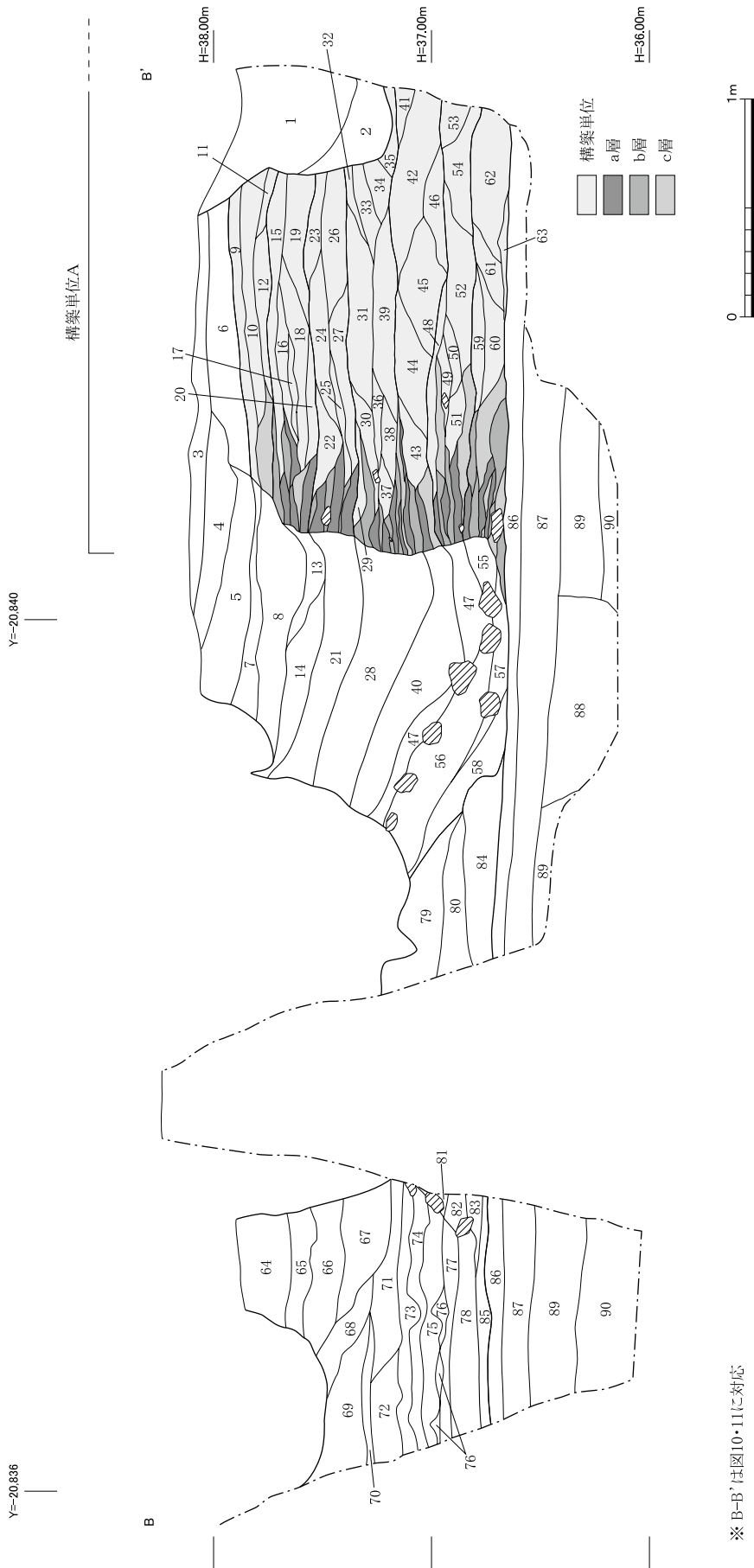


图14 1区東西攪乱南壁断面图 (1:30)

※ B-B' は图10・11に対応

1	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂
2	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂
3	10YR4/4 褐色泥砂 細砂混
4	2.5Y8/6 黄色泥砂 粗砂混 締まり強
5	7.5YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混
6	10YR5/4 にぶい、黄褐色泥砂 粗砂混
7	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂 粗砂混
8	10YR8/6 黄褐色泥砂 粗砂混
9	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック混 粘性有
10	10YR5/6 黄褐色泥砂 粗砂混
11	10YR7/6 明黄褐色泥砂
12	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 細砂混
13	10YR4/1 褐色泥砂 粗砂混 2.5Y8/6 黄色泥砂ブロック少量混
14	7.5YR5/2 灰褐色 細砂・粗砂混 10YR8/6 黄褐色粘土ブロック混
15	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
16	10YR4/2 灰黄褐色泥砂
17	10YR4/2 灰黄褐色泥砂
18	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 粘性有
19	10YR4/1 褐色泥砂 粘性有
20	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粗砂混
21	7.5YR4/2 灰褐色泥砂 粗砂混
22	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
23	10YR5/1 褐色泥砂 粘性有
24	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 粗砂混
25	10YR4/1 褐色泥砂 粘性有
26	10YR6/1 褐色泥砂 粘性有 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
27	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 粗砂混
28	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂
29	7.5YR5/2 灰褐色泥砂 粘性有
30	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
31	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック混
32	2.5Y7/8 黄色泥砂 粘性有
33	10YR4/1 褐色泥砂
34	2.5Y7/6 明黄褐色泥砂
35	10YR6/1 褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
36	10YR5/1 褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
37	10YR6/1 褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
38	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 細砂混
39	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック混
40	7.5YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混
41	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粘性有
42	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂 細砂・粗砂混
43	10YR5/4 にぶい、黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック混
44	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
45	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 10YR6/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
46	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂
47	10YR5/6 黄褐色泥砂 粗砂混
48	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 粘性有

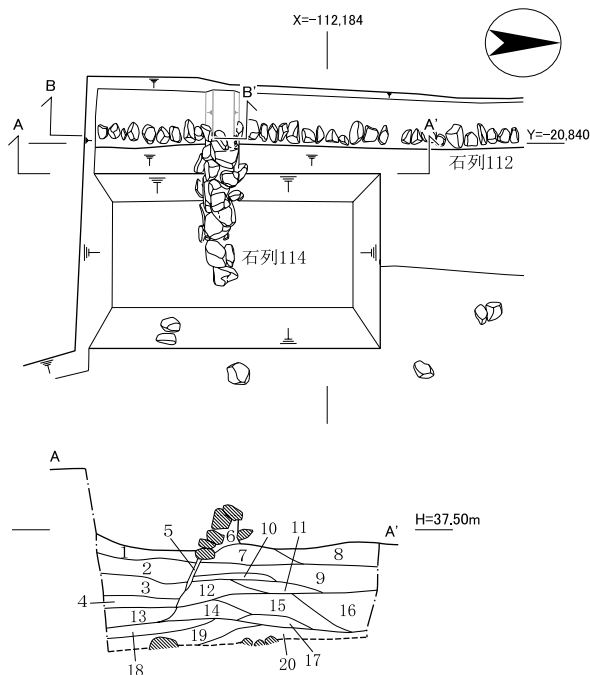
V層

49	10YR4/1 褐色泥砂 粘性有
50	10YR5/3 にぶい、黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
51	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
52	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 10YR6/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
53	10YR6/6 明黄褐色泥砂
54	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂 10YR6/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
55	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 細砂混
56	10YR7/8 黄褐色泥砂 2.5Y6/4 にぶい、黄色泥砂シルトブロック混
57	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 粘性有
58	10YR7/8 黄褐色泥砂 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂シルトブロック混 粘性有
59	10YR5/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
60	10YR5/1 褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
61	10YR4/1 褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック少量混
62	10YR4/2 灰黄褐色泥砂 2.5Y7/6 明黄褐色泥砂ブロック混
63	2.5Y7/4 浅黄褐色泥砂 粘性有
64	2.5Y6/4 にぶい、黄褐色泥砂 粗砂多量混
65	2.5Y5/3 黄褐色泥砂 粗砂多量混 土師器片少量混 層界に鉄分沈着
66	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 細砂・粗砂混 土師器片少量混
67	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 細砂混 2.5Y6/4 にぶい、黄色泥砂ブロック混
68	7.5YR4/4 褐色泥砂
69	10YR4/3 にぶい、黄褐色泥砂 土師器片少量混 10YR4/6 褐色粘土ブロック多量混
70	2.5Y3/2 黒褐色泥砂 細砂混 粘性有
71	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 細砂混 土師器片少量混
72	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 粗砂・細砂混 土師器片少量混
73	2.5Y3/2 黒褐色泥砂 土師器片少量混 粘質有
74	10YR5/8 黄褐色粘土 締まり強 粘性有
75	2.5Y3/2 黒褐色泥砂 土師器片少量混
76	10YR4/6 褐色粘土 粘性有
77	2.5Y3/1 黒褐色泥砂 粗砂混 土師器片少量混
78	10YR3/2 黒褐色泥砂 土師器片少量混 粘性有
79	10YR7/8 黄褐色泥砂 粘性有
80	10YR6/8 明黄褐色泥砂 φ3cm以下の礫混 粘性有
81	10YR4/6 褐色粘土 粘性有
82	2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 締まり無 粘性無
83	2.5Y5/4 黄褐色粘土 締まり無 粘性有
84	7.5YR3/2 黒褐色泥砂 粗砂混
85	2.5Y3/1 黒褐色泥砂 粗砂混 締まり強 粘性無
86	10YR2/3 黒褐色泥砂 粗砂・細砂多量混 土師器片少量混
87	2.5Y3/1 黒褐色泥砂 シルト・粗砂混 土師器片少量混 粘質有
88	10YR2/2 黒褐色泥砂 粗砂・細砂混 土師器片少量混 粘質有
89	2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂 シルト 粘性有
90	2.5Y2/1 黒色泥砂 シルト

VI層

- a 5YR3/4 暗赤褐色粘土 締まり強
b 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 締まり強
c 2.5Y8/6 黄色泥砂

V層



- 1 2.5Y5/4 黄褐色シルト 粘性有 締まり強
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 粘性有
- 3 10YR5/6 黄褐色粘土 粗砂混 締まり強
- 4 2.5Y5/6 黄褐色シルト 10YR4/4 褐色砂泥ブロック混
- 5 10YR4/4 褐色砂泥 黒色粘土ブロック混 粘性有(型枠痕)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 8 2.5Y6/3 黄色粘土ブロック混 中央部締まり強
- 9 10YR4/4 褐色砂泥
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粘性有 締まり強
- 11 10YR6/4 にぶい黄色砂泥 粘性有
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粘性有
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 粗砂混
- 14 10YR7/4 浅黄色シルト
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混
- 16 10YR7/4 浅黄色シルト 10YR3/4 暗褐色砂泥ブロック混
- 17 10YR4/4 褐色砂泥 10YR7/4 浅黄色ブロック混
- 18 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 10YR4/4 褐色砂泥ブロック混
- 20 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂

構築単位A東縁部検出状況

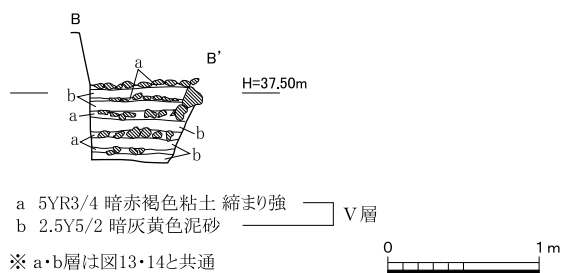


図15 1区地業断割実測図 (1:50)

構成されている。構築単位B西縁部のX=-112.192以北は、石列113や版築の積み土が不明瞭となり、調査区中央部では黄褐色泥砂と黒褐色泥砂の互層が認められる(図14、巻頭図版3-2、図版3-2)。なお、各構築単位の内側は、礫や遺物がほとんど混在しない黄褐色泥砂ブロック混じりの泥砂で構築している。

構築単位Bの中心部で礫群115を検出した。この礫群は、構築単位Bの核となる土塁状の高まり(図13-106~110層)上で認められた。

石列114を構築単位の境界で確認した(図15、図版2)。断割調査の結果、石組の直下に板状の痕跡を確認した(図15-5層)。造成時に板の型枠を当て、その北側を地業構築土で充填した痕跡と考えられる。

2) 江戸時代

SD62(図13、図版1) 調査区中央で検出した断面逆台形の南北溝である。北側・南側は調査区外へ延長する。幅約3.0m、深さ0.7mを測る。方位は、北で西へ約2°傾く。炭化物を含む埋土には葉理が認められる。SD67と重複する。瓦類、染付などの陶磁器類などが出土した。

SD67(図13、図版1) 調査区中央で検出した断面逆台形の南北溝である。SD62を掘り直した溝である。北側・南側は調査区外へ延長する。幅約3.0m、深さ0.9mを測る。方位は北で西へ約2°傾く。炭化物を含む埋土には葉理が認められる。

SA107(図13・16、図版1) 布掘掘形をもつ南北方向の柱列である。SD62と重複関係にある。方位は北で西へ約1°傾く。柱穴の径は0.15~0.5m、深さ0.15~0.3mである。布掘掘形の内部から、染付などの陶磁器類が出土している。

SA108(図16、図版1) SD62の西側に敷設された南北方向の柱列である。方位は北で東へ約2°傾く。柱穴の径は約0.3~0.4m、深さ約0.2~0.4mである。柱間は1.8mである。柱穴からは、染付などの陶磁器や瓦類が出土した。いずれも小片である。

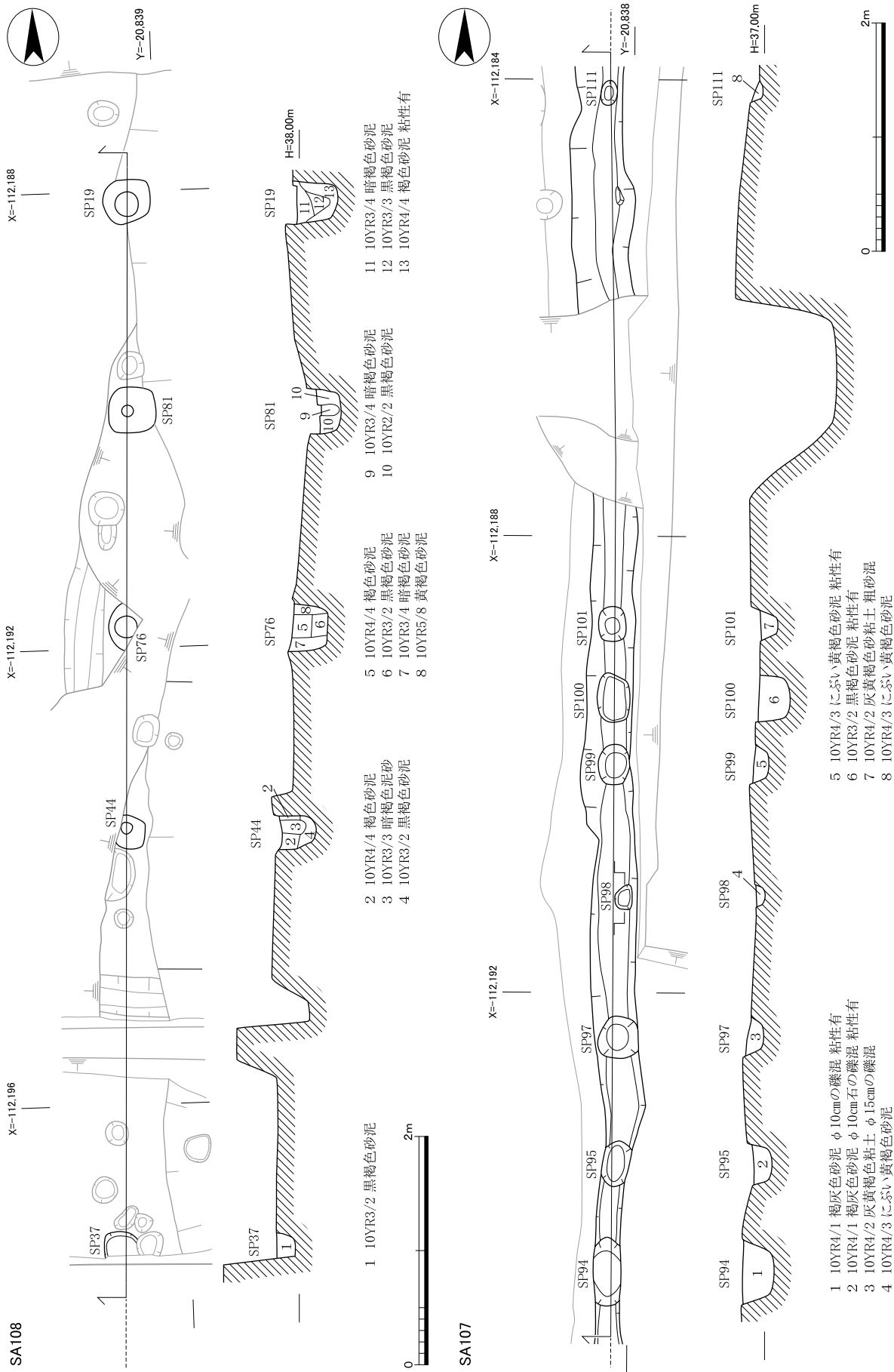


図16 1区SA107・108実測図 (1 : 50)

SK10 調査区南西で検出した土坑である。掘形は楕円形を呈する。南北0.4m、東西0.5m、深さ0.18mを測る。江戸時代前期の軒丸瓦が出土した。

SK49 (図12、図版1) 調査区東側で検出した土坑である。東半分は調査区外となる。検出した規模は南北1.8m、東西1.0m、深さ0.9mである。掘形は方形を呈する。陶磁器や土師器、瓦類が出土した。

SK60 (図12) 調査区北東隅で検出した土坑である。北半分と東半分は調査区外となる。検出した規模は南北2.2m、東西0.6m、深さ0.9mである。掘形は方形を呈する。陶磁器や瓦類が出土した。

SP110 (図14) 北半分を現代の東西攪乱で欠損している。西側は調査区外となる。検出した規模は東西0.4m、南北0.4m、深さ0.9mである。

SX116 (図13) 調査区西端で確認した落込みである。落込みの西側は調査区外となる。検出した規模は南北9.0m、東西0.5m、深さ0.7mである。陶磁器や瓦類が出土した。

(4) 2区の遺構 (図17、巻頭図版2、図版4)

1) 平安時代後期

土地造成土 (図18～20、巻頭図版2・4、図版4) 調査区全域で確認した。整地層 (VI層) の上に構築されている。厚さ約1.2mを測る。全体として、調査区東側 (三十三間堂側) が高く、西側に向かって緩やかに標高を減じている。

調査区南東隅では断面観察によって造成単位を確認した。礫を多く含む泥砂と、礫・砂・シルトを含む砂泥を積み上げて構築している。一部調査区外のため全形は不明であるが、確認した部分で南北約4m、東西約3mを測る。

造成単位の西側は、調査区北側では黄褐色泥砂と黒褐色泥砂の互層を確認した (図20、巻頭図版4-2)。造成土は西側に向かって傾斜している。一方、調査区南側では黄褐色泥砂と暗褐色～褐色灰色泥砂で構築されている (図18、巻頭図版4-1)。

礫群272・273を調査区中央で検出した。これらは、IV層上面で確認した精良な砂泥による整地層 (図18-17・18層、図19-6・7層、図20-2・3層) 内に含まれている。礫群は粗密あるが面的に広がり、一部で石列274・275を確認した。これらは上面が傾斜面となる整地層の土留めと考えられる。

遺物は弥生時代から平安時代後期の土器類が出土している。図18-23層からは、土師器皿が多量に出土した。いずれも小片のため図化できた個体は少ないが、時期は12世紀後半と考えられる (図28-38・39)。

2) 鎌倉時代

SK214 (図21、図版4) 調査区中央で検出した土坑である。南北2.7m、東西2.0m、深さ約0.7mである。SK215と重複する。埋土から炭や焼土とともに、大量の瓦類が出土した。

SK215 (図21、図版4) 調査区中央で検出した土坑である。規模は南北2.0m、東西3.0m、深

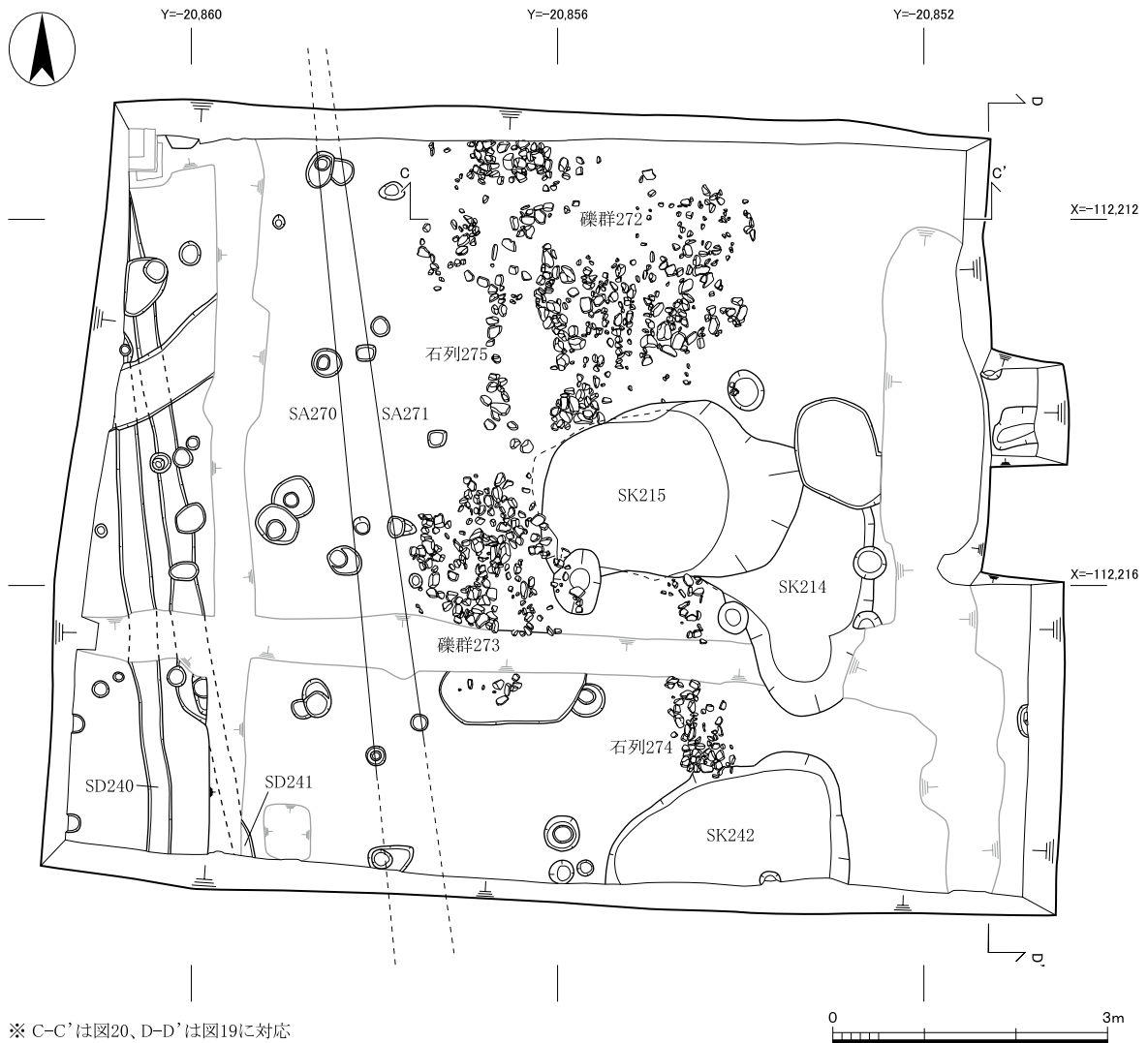


図17 2区平面図 (1 : 80)

さ約0.7mを測る。埋土から大量の瓦類が出土した。

SK242 (図18) 調査区の南東側で検出した土坑である。南半分は調査区外となる。南北1.4m以上、東西2.6m、深さ約0.6mを測る。埋土から大量の瓦類が出土した。

3) 江戸時代

SD240 (図18) 調査区の西側で検出した南北溝である。北側・南側は調査区外へ延長する。方位は北で西へ $4^{\circ}47'$ 傾く。断面方形を呈する。幅0.6m、深さ約0.2mを測る。

SD241 (図18) 調査区の西側で検出した南北溝である。北側・南側は調査区外へ延長する。方位は北で西へ $8^{\circ}22'$ 傾く。断面方形を呈する。幅0.6m、深さ約0.2mを測る。

SA270 (図22、図版4) 南北方向の柱列である。方位は北で西へ $5^{\circ}28'$ 傾く。柱穴の径は0.2~0.35m、深さ約0.2~0.4mである。柱間は2.2mを測る。

SA271 (図22) 南北方向の柱列である。方位は北で西へ $8^{\circ}03'$ 傾く。柱穴の径は0.15~0.3m、深さ約0.1mである。柱間は2.0mを測る。

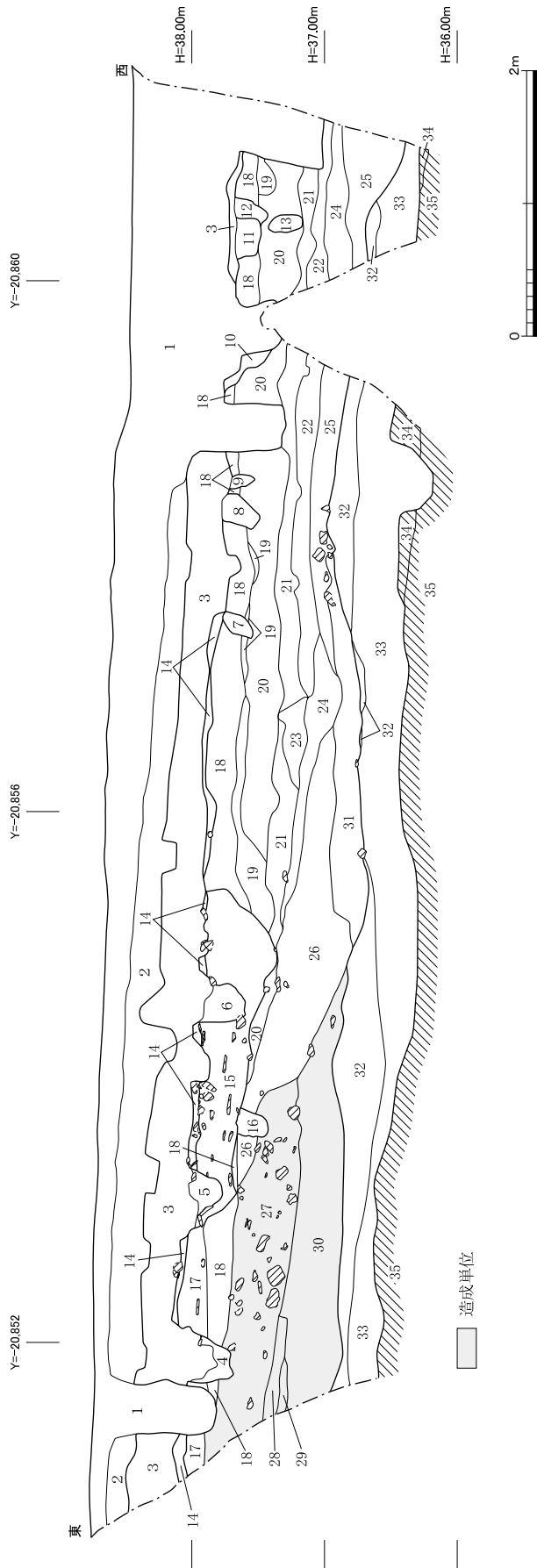


図18 2区南壁断面図 (1:50)

- | | | | |
|--|---|---|--|
| <p>1 10YR6/1 褐灰色砂泥</p> <p>2 2.5Y6/6 明黄褐色粘土</p> <p>3 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 石・瓦多量混</p> <p>4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (SP260)</p> <p>5 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (SP261)</p> <p>6 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (SP262)</p> <p>7 2.5Y6/2 灰褐色砂泥 (SP263)</p> <p>8 2.5Y6/2 灰褐色砂泥 (SP264)</p> <p>9 2.5Y6/2 灰褐色砂泥 (SP265)</p> <p>10 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂</p> <p>11 2.5Y6/1 黄灰色泥砂</p> <p>12 10YR7/2 にぶい黄褐色砂泥 (SP267)</p> <p>13 10YR6/1 褐灰色砂泥 (SP266)</p> <p>14 10YR4/4 灰褐色砂泥</p> <p>15 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 灰・瓦混</p> <p>16 2.5Y6/2 灰褐色砂泥 (SP269)</p> <p>17 10YR4/6 褐色砂泥 灰・瓦混</p> <p>18 10YR7/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 締めり強</p> <p>19 2.5Y4/3 オリープ褐色砂泥</p> | <p>I 層</p> <p>II 層</p> <p>III 層</p> <p>IV 層</p> | <p>20 7.5YR5/2 灰褐色~2.5Y5/4 黄褐色泥砂 粘性有</p> <p>21 2.5YR5/1 赤灰色泥砂 シルト混 粘性有 締めり強 2.5Y5/3 泥砂ブロック少量混</p> <p>22 10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混 土師器小片混</p> <p>23 10YR6/1 褐灰色砂泥 土師器小片 多量混</p> <p>24 7.5YR6/1 褐灰色泥砂泥・粗砂混 粘性有 黄灰色粘土の偽礫混
10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂ブロック混</p> <p>25 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 粗砂混 締めり強</p> <p>26 10YR4/1 褐灰色泥砂 粗砂多量混</p> <p>27 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 粘性有 細砂・φ10cm大の礫多量混</p> <p>28 7.5YR3/3 暗褐色泥砂 粘性有 φ20cm大の礫多量混 黄灰色粘土の偽礫混</p> <p>29 10YR4/3 暗褐色泥砂 粘性有 φ20cm大の礫多量混 鉄分多量混
5Y5/2 灰オリープ色泥砂ブロック少量混</p> <p>30 10Y4/1 灰色泥砂 粗砂混 粘性有</p> <p>31 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 粗砂・φ0.5cm以下礫多量混 土師器小片混 粘性有</p> <p>32 10Y4/1 灰色泥砂 粘性有</p> <p>33 5Y5/1 灰色砂泥ブロック混・粗砂・灰青色粘土偽礫混</p> <p>34 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 シルト混 粘性有 締めり無</p> <p>35 5Y5/1 灰色砂泥 シルト・粗砂多量混 粘性有 締めり無 (グラライ化)</p> | <p>IV 層</p> <p>VI 層</p> <p>VII 層</p> <p>VIII 層</p> |
|--|---|---|--|

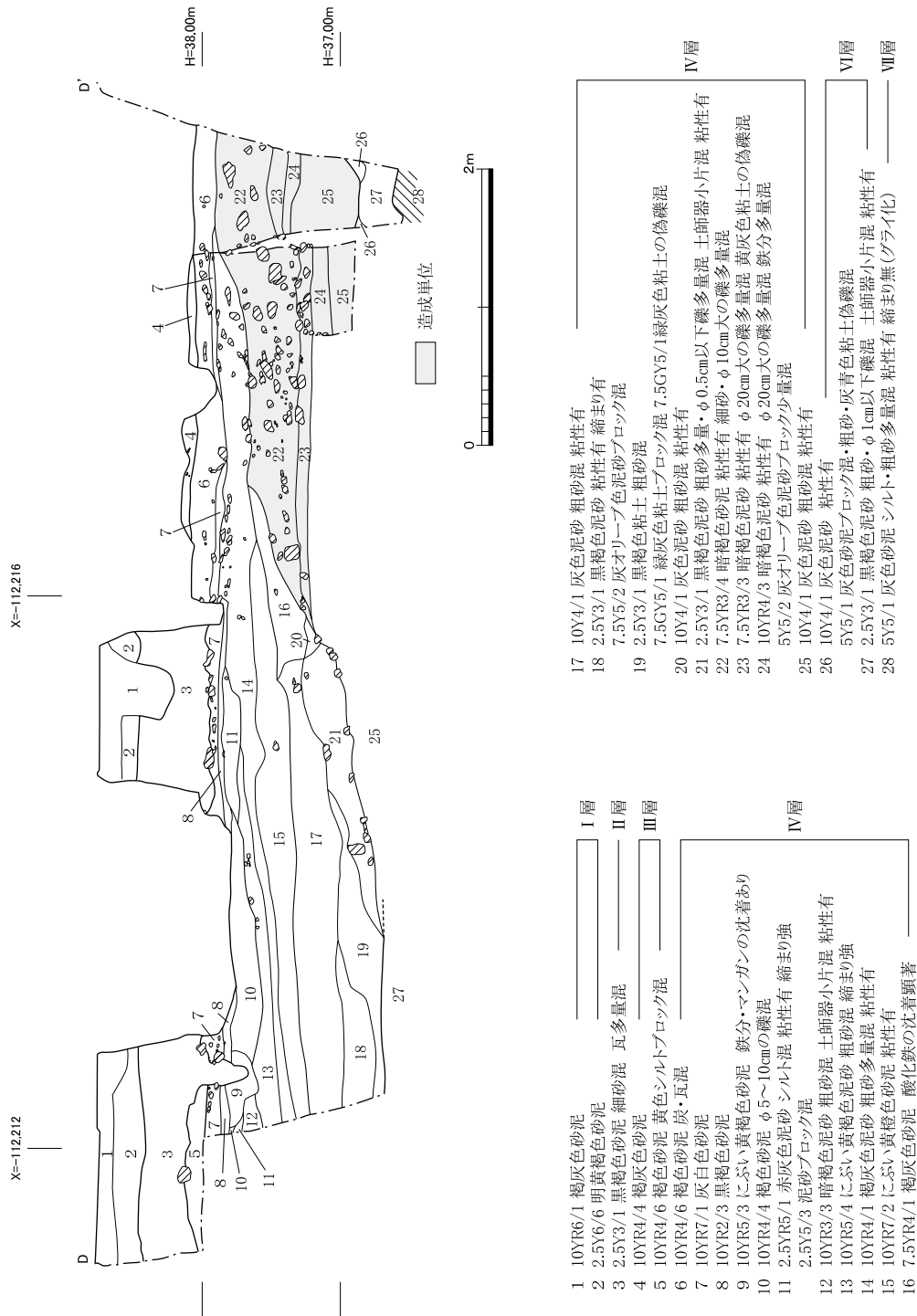
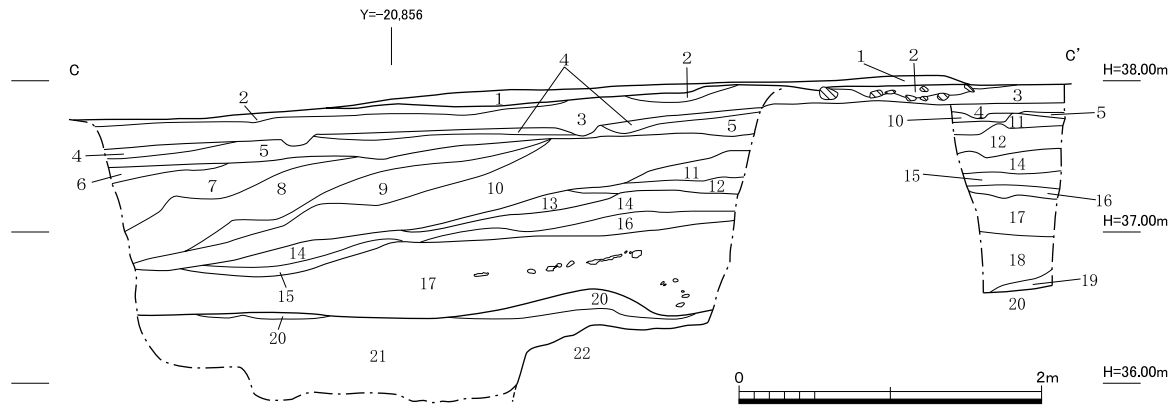


図19 2区東壁断面図 (1:50)

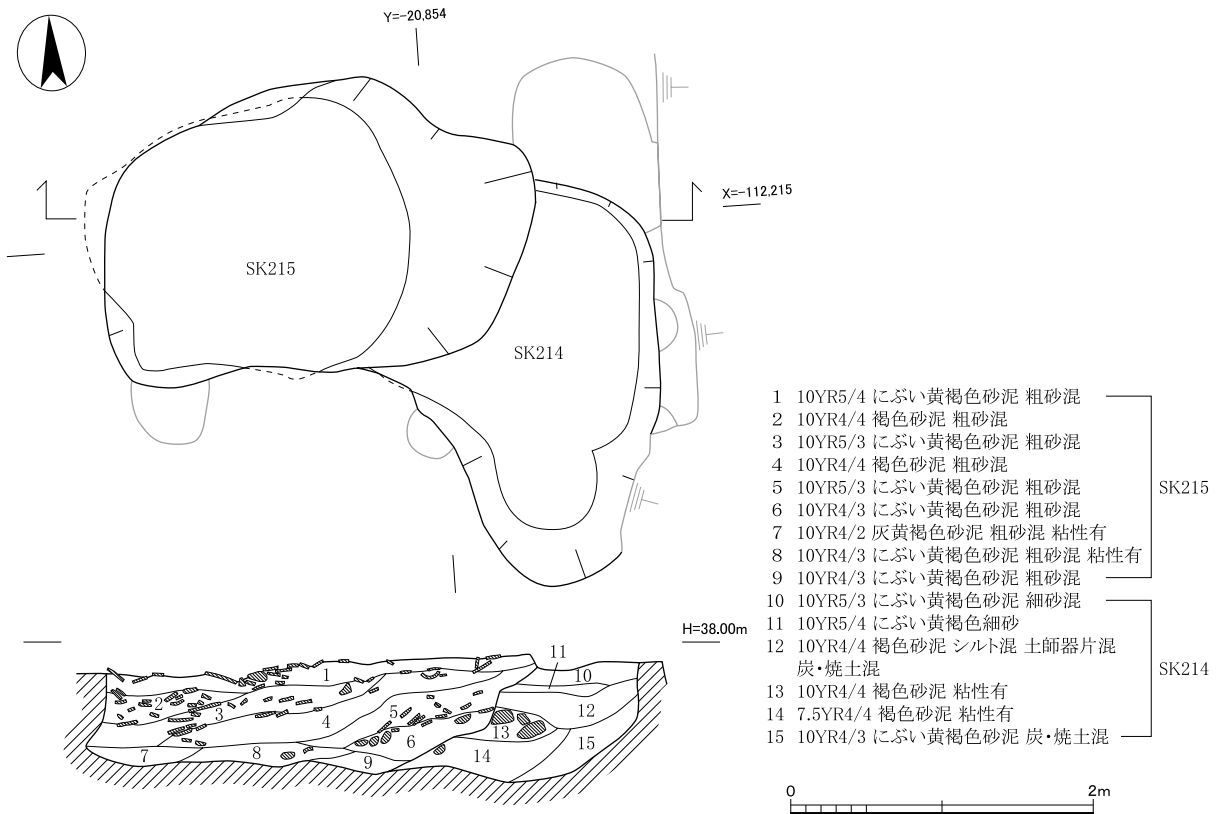
※ D-D' は図17に対応



- | | | | | | |
|----|--|------|------------------------------|---------------------------------|-----|
| 1 | 10YR4/4 褐灰色砂泥 | III層 | 13 | 7.5YR6/1 褐灰色泥砂 粗砂・黄灰色粘土の偽礫混 粘性有 | IV層 |
| 2 | 10YR4/6 褐色砂泥 黄色シルトブロック混 | IV層 | 14 | 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 粗砂混 | |
| 3 | 10YR7/1 灰白色砂泥 石混 | | 15 | 7.5Y7/1 灰白色泥砂 粗砂多量混 | IV層 |
| 4 | 10YR2/3 黒褐色砂泥 | 16 | 10YR7/2 にぶい黄橙色砂泥 粘性有 | | |
| 5 | 10YR4/4 褐色砂泥 φ5~10cmの礫混 | 17 | 10Y4/1 灰色泥砂 粗砂混 粘性有 | IV層 | |
| 6 | 7.5YR3/1 黒褐色泥砂 粘性有 縮まり強 | 18 | 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 粘性有 縮まり有 | | |
| 7 | 5Y7/2 灰白色砂泥 細・粗砂・φ0.5cm以下の礫混 | 19 | 7.5Y5/2 灰オリーブ色泥砂ブロック混 | IV層 | |
| 8 | 2.5Y2/1 黒色泥砂 粗砂混 粘性有 | 20 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土 粗砂・緑灰色粘土の偽礫混 | | |
| 9 | 10YR6/8 明黄褐色泥砂ブロック少量混 | 21 | 7.5GY5/1 緑灰色粘土ブロック混 | VI層 | |
| 10 | 5Y6/2 灰オリーブ色泥砂 粗砂・φ10cm以下の礫混 黄灰色シルト質粘土の偽礫を含む | 22 | 10Y4/1 灰色泥砂 粗砂・灰青色粘土偽礫混 粘性有 | | |
| 11 | 10YR2/2 黒褐色泥砂 土師器小片多量混 | | 5Y5/1 灰色シルトブロック混 | VI層 | |
| 12 | 2.5YR5/1 赤灰色泥砂シルト混 粘性有 | | 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 粗砂・φ1cm以下の礫混 | | |
| | 2.5Y5/3 泥砂ブロック少量混 | | 土師器小片混 粘性有 | | |
| | 10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂混 土師器小片混 粘性有 | | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 シルト混 粘性有 縮まり無 | | |

※ C-C'は図17に対応

図20 2区断割北壁断面図 (1:50)



- | | | |
|----|-------------------------------|-------|
| 1 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 | SK215 |
| 2 | 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混 | |
| 3 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 | SK215 |
| 4 | 10YR4/4 褐色砂泥 粗砂混 | |
| 5 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 | SK215 |
| 6 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 | |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 粗砂混 粘性有 | SK214 |
| 8 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 粘性有 | |
| 9 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粗砂混 | SK214 |
| 10 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 細砂混 | |
| 11 | 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 | SK214 |
| 12 | 10YR4/4 褐色砂泥 シルト混 土師器片混 炭・焼土混 | |
| 13 | 10YR4/4 褐色砂泥 粘性有 | |
| 14 | 7.5YR4/4 褐色砂泥 粘性有 | |
| 15 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土混 | |

図21 2区SK214・215実測図 (1:50)

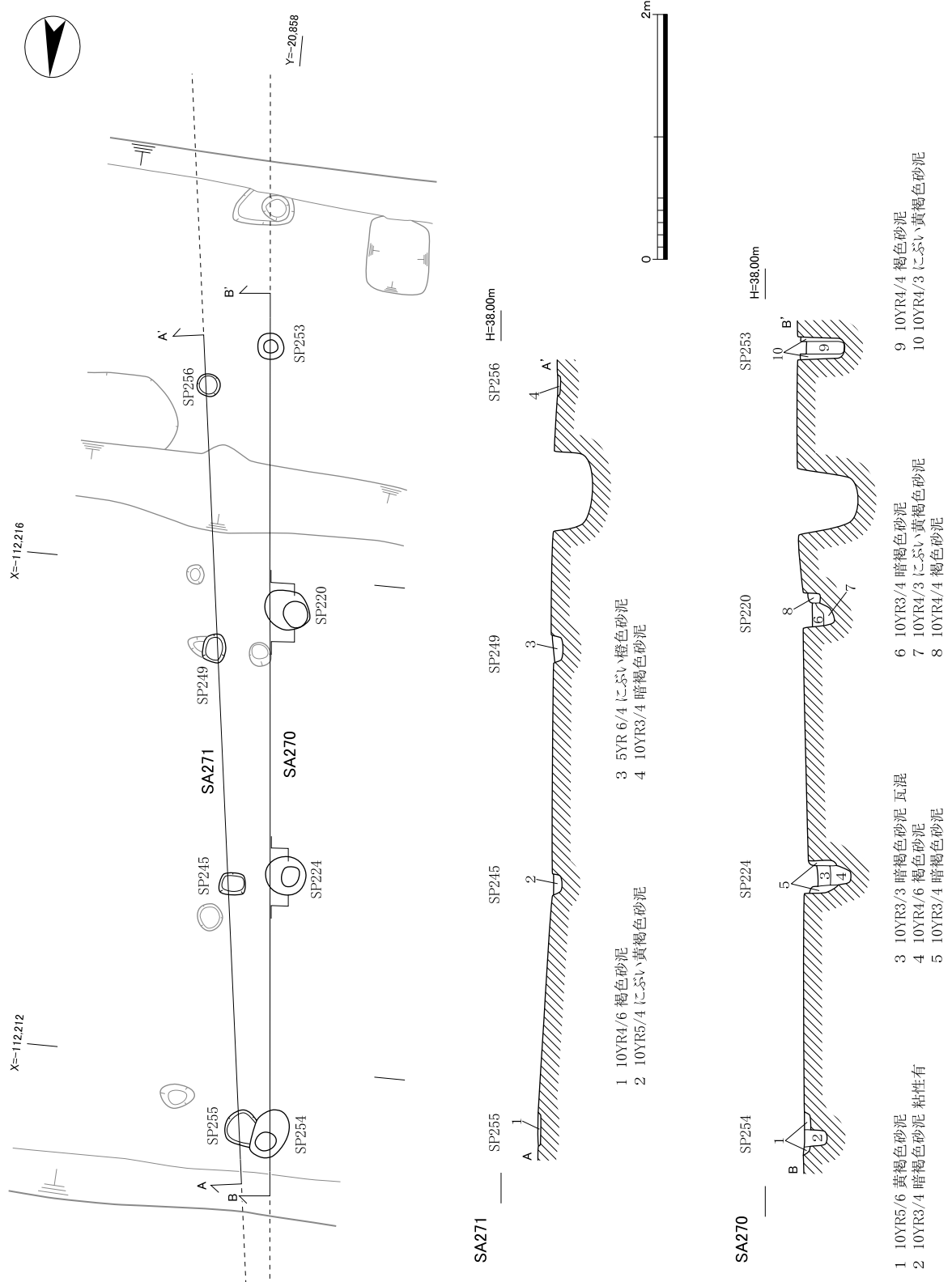


図22 2区SA270・271実測図 (1 : 50)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は縄文時代から江戸時代の土器類を中心に、瓦類や銭貨などが出土している¹⁾。遺物総数は遺物整理箱で78箱である。瓦類の出土量が最も多い。

縄文時代・弥生時代は、V層（建物地業構築土）及びIV層（土地造成土）から少量出土している。

平安時代前期の遺物は、VI層（建物地業・土地造成前整地層）や、V層（建物地業構築土）及びIV層（土地造成土）から土器類が出土している。

平安時代後期の遺物は、VI層（建物地業・土地造成前整地層）や、V層（建物地業構築土）及びIV層（土地造成土）から12世紀後半の土器類が出土した。土師器皿は多量に出土したが、小片が多く凶化できない個体が多い。また、瓦溜と考えられる土坑（SK214・215・242）からは、三十三間堂創建期のものと考えられる多量の瓦類が出土しているが、軒瓦は極めて少ない。2次被熱を受けた瓦も確認できる。

鎌倉時代の遺物は、III層（鎌倉時代整地層）から土師器皿が出土している。土師器皿は小片が多く、凶化できる個体は少ない。

江戸時代の遺物が最も多い。溝や土坑から、主に17世紀後半以後の土器類が出土している。染付など陶磁器類の出土が多く、土師器皿は少量である。瓦類も出土するが、軒瓦は少ない。

(2) 土器類 (図23～28、図版5・6、付表1)

1) 1区出土土器 (図23～27、図版5・6、付表1)

VI層出土土器 (1・2) 平安時代の土器が出土した。1は土師器の皿である。口縁部外面のナ

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器1点		
弥生時代	弥生土器		弥生土器2点		
平安時代前期	土師器、須恵器、灰釉陶器、 緑釉陶器、輸入陶磁器		土師器2点、須恵器3点、灰釉 陶器1点、緑釉陶器1点、輸入 陶磁器1点		
平安時代後期 ～鎌倉時代	土師器、山茶碗、瓦器、輸 入陶磁器、瓦類		土師器14点、山茶碗1点、瓦類 14点		
江戸時代	土師器、軟質施釉陶器、焼 締陶器、土師質土器、国産 陶磁器、瓦類、土製品、銭 貨		軟質施釉陶器5点、土師質土器 2点、国産陶磁器10点、瓦類4 点、土製品3点、銭貨1点		
合 計		86箱	65点 (6箱)	2箱	78箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

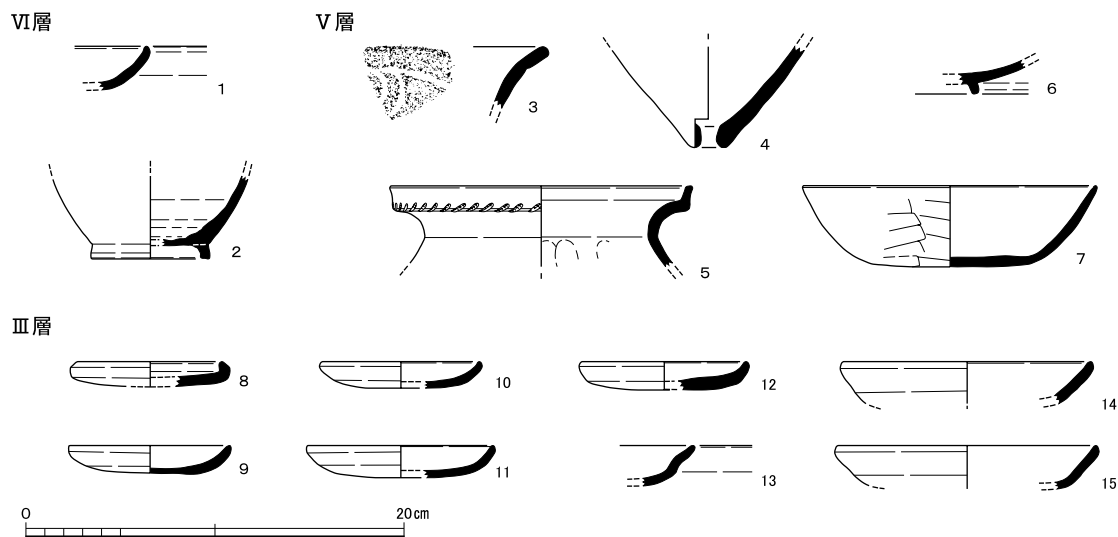


図23 1区出土土器実測図1 (1:4)

デは1段で、端部断面は丸みを帯びた三角形状を呈する。京都V期新段階前後と考えられる。2は須恵器の小型壺である。丸みを帯びた胴部を持つ。高台を持ち、底部のヘラ切り痕をナデ消している。時期は8世紀末から9世紀初頭である。

V層出土土器 (3~7) 縄文土器、弥生土器、平安時代前期・後期の土器が出土した。縄文土器と弥生土器は少量である。3は縄文土器の鉢である。4は弥生土器の有孔鉢の底部。5は弥生土器の甕である。受口状の口縁部を持ち、口縁部外面に列点文を巡らす。弥生時代後期に属する。

平安時代前期の土器は、土師器・緑釉陶器が出土している。7は土師器の椀である。外面にヘラケズリ調整を施す。京都I期中段階と考えられる。6は猿投窯産緑釉陶器の皿である。9世紀後半である。

III層出土土器 (8~15) 8~15は土師器皿である。8はコースター状を呈する皿である。9~15は口縁部の端部外面に内傾する面を形成しており、上端部断面が三角形状を呈する。13は底部から外反気味に立ち上がる。京都VI期中段階から新段階と考えられる。

SK49出土土器 (16・17) 16は瀬戸の色絵椀である。内面底部中央に昆虫文を施す。17は土師質土器の手あぶりである。赤土の素地に、赤の化粧土と透明釉を施す。口縁部外面に菊の浮文。高台内に「楽」の印銘をもつ (図24)。

SK60出土土器 (20~24) 20は京焼青磁の三足香炉である。底面に「御本山御改」を印刻する。21は伊万里の青磁染付皿である。口縁内面に四方襷文を配す。内面底部に2条の圈線を施す。22は軟質施釉陶器の皿である。内面に圈線もち、京都XIV期の土師器皿の形態に類似する。口縁部内面に赤土を化粧掛けし、全体に透明の鉛釉を施す。底部外面に墨書をもつが判読できない。23は軟質施釉陶器の皿である。内面に桐と菊を刻印し、口縁部内面には2条、内面底部に1条の圈線を施す。内面に白土を化粧掛けした後、透明な鉛



図24 「楽」印銘 (17)

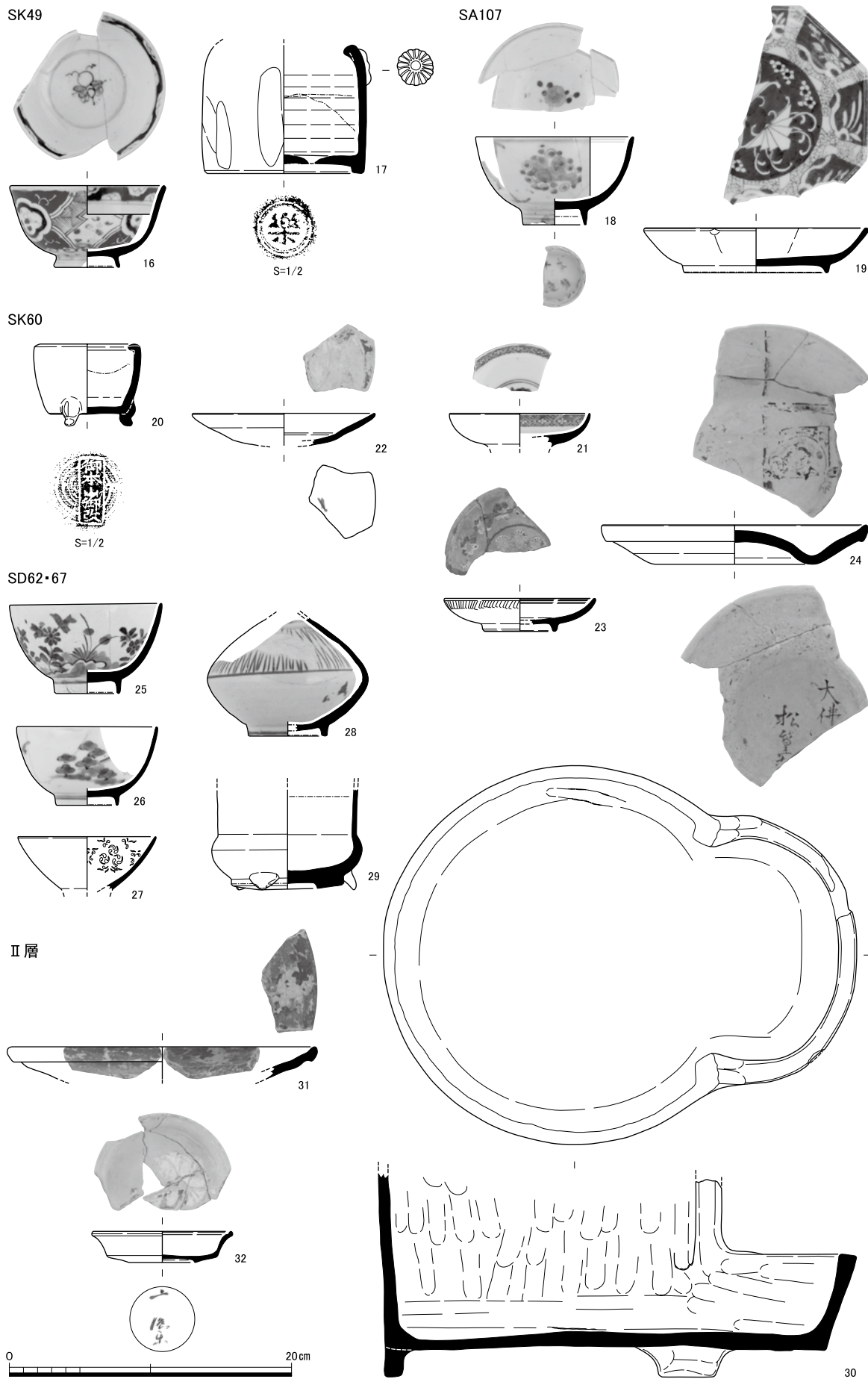


图25 1区出土土器实测图2 (1:4)

釉を施している。24は軟質施釉陶器の皿である。型押しによる成型で、内外面に透明の鉛釉を薄く施す。内面に墨絵、底部外面に「大仏□ 松篁□」を墨書している²⁾。以上は、19世紀後半以後の土器群である。

SD62・67出土土器（25～30）当初、SD62とSD67の掘り直しを認識していなかったため遺物が混在する。25は伊万里染付の椀である。外面に草花文。花の花弁は型紙摺り技法で彩色している。26は伊万里の染付椀である。外面に山水文。圏線を高台内に1本、高台外に2本施す。27は京焼白磁の椀である。内面にイッチン技法で右巻き3巴文を描き、最後に全面透明の鉛釉を施す。28は伊万里の油壺である。最大径は胴部中位よりやや下にあり、断面形は算盤形を呈する。佐賀県有田町弥源次窯跡出土品に類例がある³⁾。29は青磁の三足香炉である。底部は削り出しによる蛇の目高台。平安京左京二条二坊十町跡SE11出土品に類例がある⁴⁾。30は土師質土器の炉である。円筒形の本体の片側を口縁部から大きく抉り、半月型の浅鉢を接合することで、平面形が8字形を呈する。下面の3方に脚が付く。平安京左京四条三坊十二町跡SK23出土品に類例がある⁵⁾。以上は、17世紀後半以後の土器群である。

SA107出土土器（18・19）18は伊万里染付の椀である。高台の作りは薄い。外面及び内底面に図案化された折枝梅文。高台内に「大明年造」の銘款をもつ。19は伊万里染付の八角皿である。内底面に図案化した牡丹花、口縁部内面に花唐草を配す。

II層出土土器（31・32）31は軟質施釉陶器の皿である。24と同型と考えられる。赤土を化粧掛けし、内面に墨絵を施す（図26）。32は軟質施釉陶器の皿である。白土の素地に、白の化粧土と透明の鉛釉を施す。内面に緑彩。高台内に墨書がある（図27）。

2) 2区出土土器（図28、図版5、附表1）

IV層出土土器（33～41）平安時代前期・後期の土器が出土した。平安時代前期の土器は、土師器・須恵器・灰釉陶器・輸入陶磁器（青磁）が出土している。33は土師器の皿である。外面ヘラケズリ調整。京都I期中段階と考えられる。34は須恵器の杯である。体部の開きは小さい。35は須恵器の甕である。胴部外面に平行タタキ。36は東濃もしくは尾張型灰釉陶器の壺である。時期は8世紀から9世紀である。37は越州窯系の青磁椀である。

平安時代後期の土器は、土師器の皿が出土している。38はコースター状を呈する皿である。底部周縁部はわずかに浅く凹む。39は口縁部外面のナデが1段で、上端部の断面が丸みを帯びた三角形状を呈する。40・41は口縁部に上下の2段ナデを施し、上段が直立する。口縁端部は丸みを帯び、



図26 内面の墨絵（31）



図27 高台内の墨書（32）

IV層

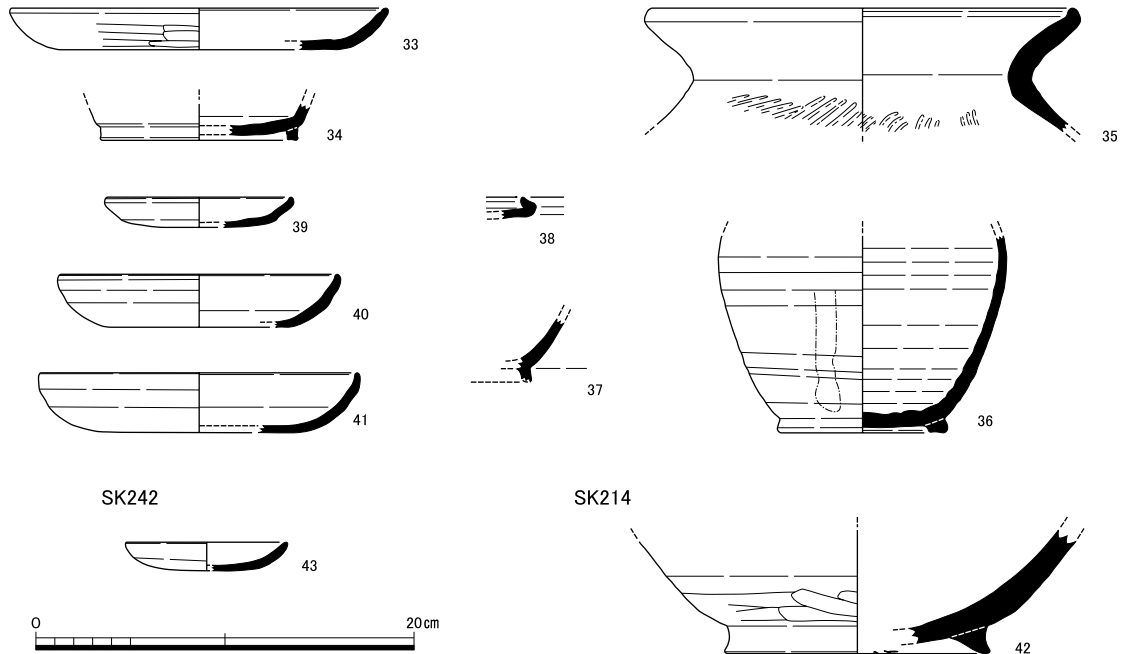


図28 2区出土土器実測図(1:4)

内面に緩い凹面が形成されている。いずれも京都V期新段階前後と考えられる。

SK214出土土器(42) 42は山茶椀である。底部は厚く、腰部は丸く立ち上がる。貼付高台は断面三角形形状を呈し、端部に藁圧痕を残す。12世紀後半である。

SK242出土土器(43) 43は土師器の皿である。口縁部外面のナデは1段で、上端部が三角形形状を呈する。

(3) 瓦類(図29・30、巻頭図版2-2、図版7・8、付表2)

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。丸瓦・平瓦が大半を占め、軒瓦は少ない⁶⁾。平安時代後期のものが多く、江戸時代の瓦類は少量出土した。

1) 軒丸瓦(図29、図版7、付表2)

44は複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。凸形中房は一部欠損する。蓮子は1+6。胎土は白色で、外面は燻しによって黒く仕上げる。大阪府四天王寺から同文瓦が出土している⁷⁾。平安時代後期から鎌倉時代初頭。

45は単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。1区Ⅲ層から出土した。凸形中房で、蓮子は1+6。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部上位は横ナデ、下位はケズリ調整、裏面指オサエを残す。丸瓦凸面に縄タタキ。山城産。平安時代後期。

46は巴文軒丸瓦である。SK215から出土した。右巻き2巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接する。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面横ナデを施す。播磨産。平安時代後期。

47は巴文軒丸瓦である。SK215から出土した。左巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互い

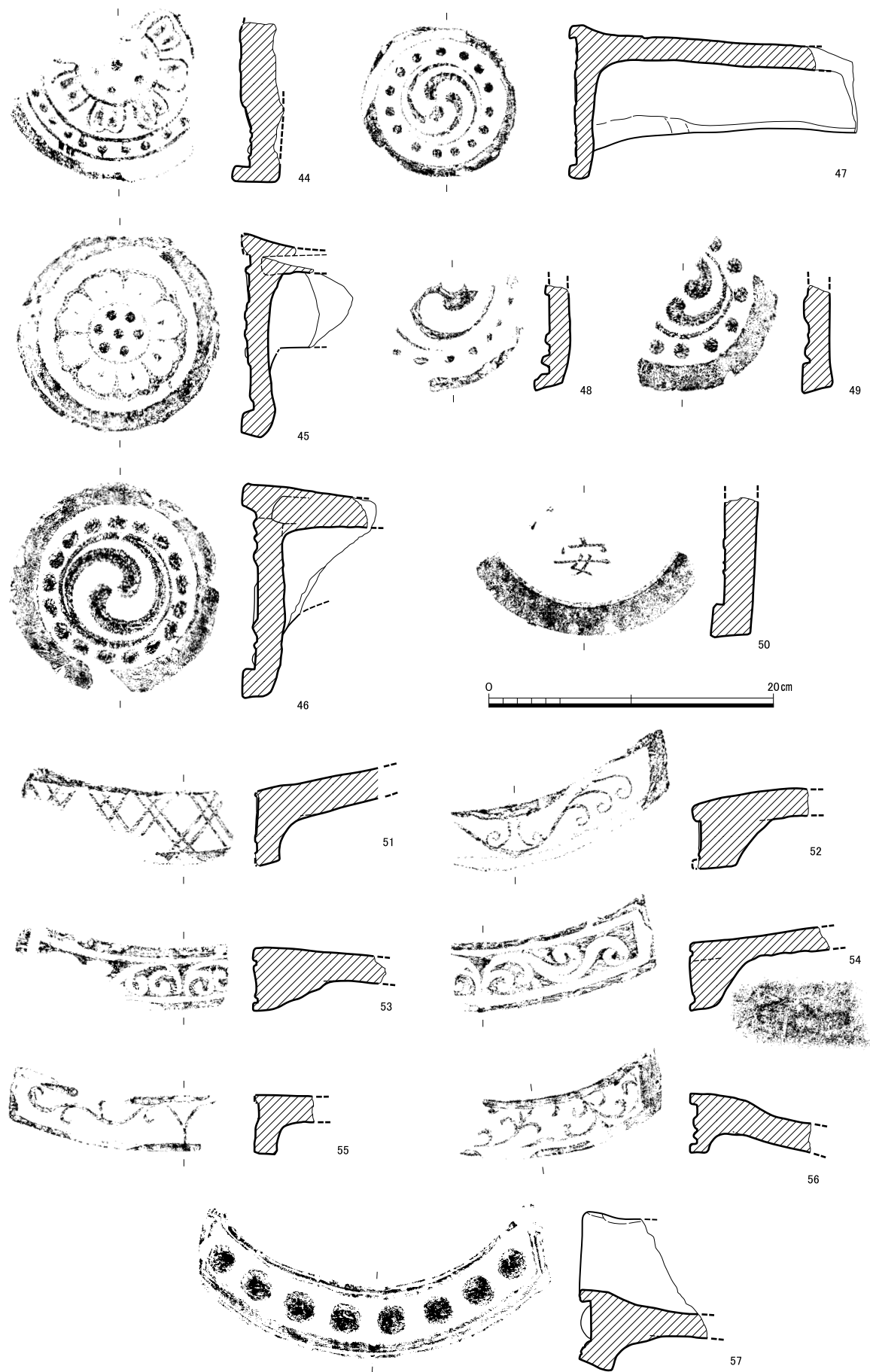


図29 出土瓦拓影及び実測図1 (1:4)

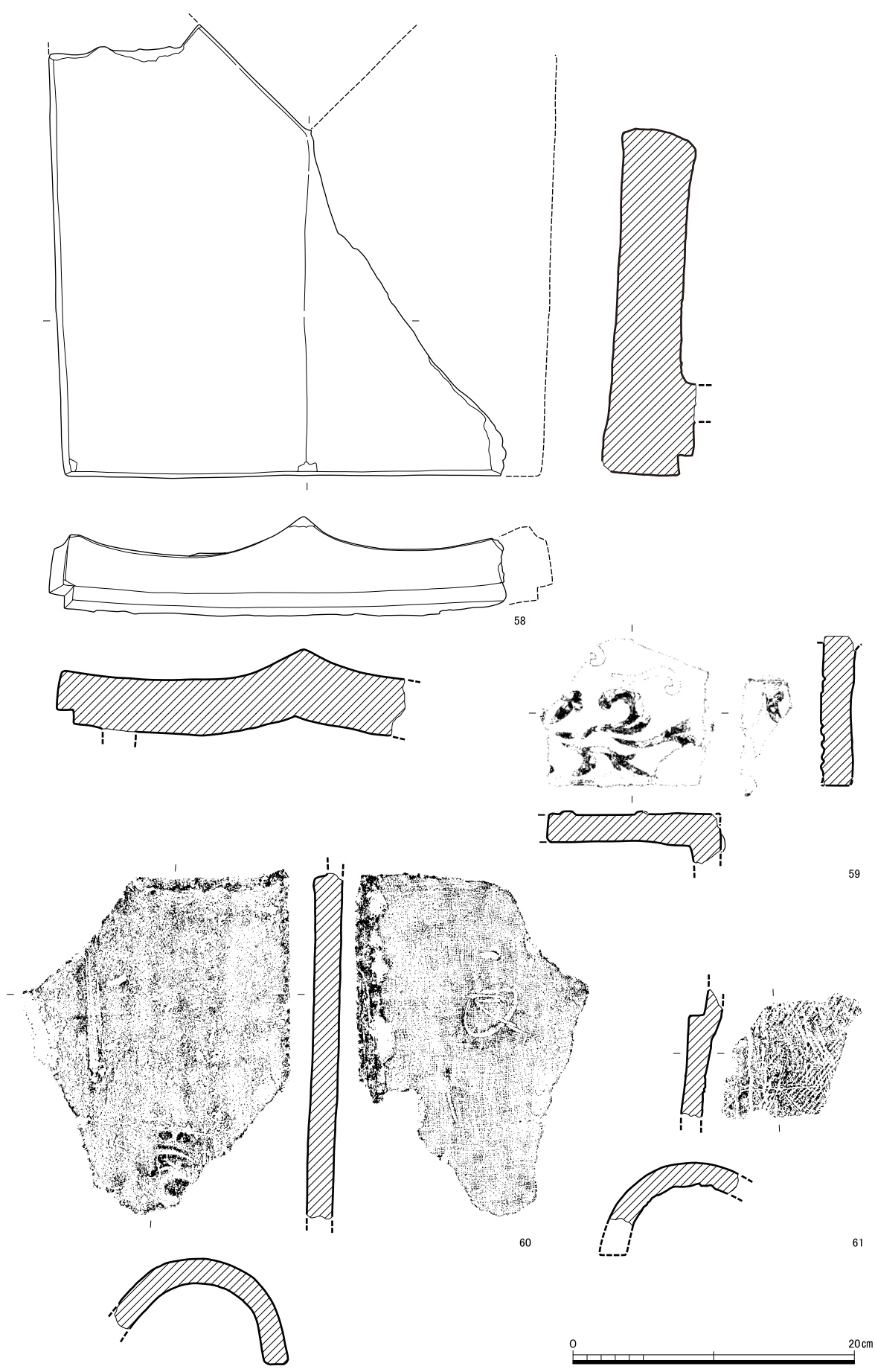


图30 出土瓦拓影及び実測図2 (1 : 4)

に接しない。瓦当部上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面ナデである。山城産。平安時代後期。

48は巴文軒丸瓦である。SK214から出土した。右巻き巴文を配する。頭部が連結し、尾部は互いに接しない。瓦当部下位は横ケズリ、裏面ナデ調整。播磨産。平安時代後期。

49は巴文軒丸瓦である。SD62から出土した。右巻き巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接する。胎土は白色で、外面は燻しによって黒く仕上げる。

50は瓦当部下位に「安」を配する軒丸瓦である。SK10から出土した。瓦当部下位はナデ後ミガキ調整、裏面にナデを施す。瓦当面の銘は「慶安三年」をあらわしたものとみられ、江戸時代の修造時に製作された軒丸瓦に同文の瓦がある⁸⁾。

2) 軒平瓦 (図29、図版8、附表2)

51は格子文軒平瓦である。1区Ⅲ層から出土した。斜格子文を配する。格子は複線である。瓦当部成形は、半折り曲げ成形である。瓦当部側面は横ナデ。顎部下縁と裏面はナデ調整を施す。平瓦凸面は布目後の糸切痕を、瓦当部上縁まで残す。凹面は縄目タタキ後にナデ調整を施す。山城産。平安時代中期から後期。

52は外行唐草文軒平瓦である。SK215から出土した。瓦当部上縁はナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面は布目が残る。凸面の格子タタキは不明。岡山県倉敷市浅原寺跡⁹⁾や延勝寺跡¹⁰⁾から、同文瓦が出土している。備前・備中系。平安時代後期。

53は外行唐草文軒平瓦である。SK214から出土した。唐草文は陰刻である。瓦当部上縁はナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面に布目、凸面は縦ナデを施す。2次被熱を受け赤化している。播磨産。平安時代後期。

54は外行唐草文軒平瓦である。SK214から出土した。唐草文は陰刻である。瓦当部成形は平瓦凸面に顎部を貼り付ける。瓦当部側面は横ナデ、顎部下縁と裏面にも横ナデを施す。平瓦凹面は、瓦当部上縁にかけて布目が残る。凸面はナデ調整で、「✓」状の線刻がある。法住寺殿跡(図8-4)から同文瓦が出土している¹¹⁾。播磨産。平安時代後期。このほかに同範の軒平瓦がSK214から1点出土している。同範瓦の瓦当部成形は包み込み技法である。

55は外行唐草文軒平瓦である。SK215から出土した。瓦当部上縁から側面は横ケズリ。顎部下面はケズリ後ナデ調整、裏面横ナデ。平瓦凹面は布目後縦ナデを施す。凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリである。播磨産。平安時代後期。

56は外行唐草文軒平瓦である。SK214から出土した。瓦当部上縁はナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面は布目後縦ナデを施す。凸面は縦ナデ。鳥羽離宮金剛心院跡¹²⁾や、兵庫県神戸市神出窯跡群・同明石市林崎三本松瓦窯跡・高砂市魚橋瓦窯から同文瓦が出土している。播磨産。平安時代後期。

57は連珠文軒平瓦である。SK215から出土した。瓦当部成形は、瓦当部中位に平瓦を当てる包み込み成形である。側面にも補足粘土を付加する。瓦当部上縁から側面は横ナデを施す。顎部下縁にケズリ、裏面横ナデ。平瓦凸面に離れ砂付着、凹面は布目後縦ナデ調整。兵庫県神戸市神出遺跡D地区から同文瓦が出土している¹³⁾。播磨産。平安時代後期。

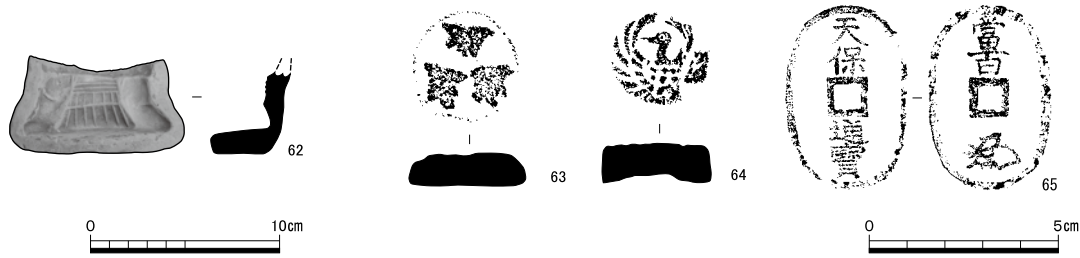


図31 出土土製品・銭貨拓影及び実測図（1：2、62のみ1：4）

3) 道具瓦（図30、巻頭図版2-2、図版8、付表2）

58は隅木先蓋瓦である。SD62から出土した。上面は低い山形を呈する。前・側面下端を二段に作る。茅負のあたる部分に刳形を設ける。上面にナデ、側面にケズリ調整を施す。下面に側板の接合痕を残す。接合部に側板を貼り付ける際のケガキ線が残る。平安時代後期から鎌倉時代初頭。

59は獅子口瓦である。SK49から出土した。前面と側面に唐草文を配する。前面上部の唐草文は陰刻、同下部は陽刻である。調整はナデ後ミガキ。中央に釘孔を穿孔する。胎土は白色で、外面は燻しによって黒く仕上げる。江戸時代。

4) 刻印瓦（図30、付表2）

60は線刻を有する丸瓦である。SK215から出土した。凸面と側面に縦ナデ、凹面に布目を残す。凸面側に左巻き巴文。巴文の頭部は離れ、尾部は互いに接する。外区に珠文が巡る。凹面側には「φ」状の線刻をもつ。平安時代後期。

61は線刻を有する丸瓦である。SD62から出土した。凸面は縄目タタキ後に横ナデ、凹面に布目後の糸切痕を残す。凹面側に「大」の線刻を施す。平安時代後期。

(4) 土製品・銭貨（図31、付表3）

62は人形の土型である。1区Ⅱ層出土。袈裟を模った僧の人形型の可能性がある。

63・64は泥面子である。いずれも1区Ⅱ層出土。63は型押しで図柄は千鳥、64は鶴である。

65は天保通寶である。1区Ⅱ層から出土した。輪の一部が欠損している。

註

- 1) 遺物は下記文献を参照した。土器類の器種や年代などは、尾野善裕氏のご教示を得た。
 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
 小松武彦「近世の土師器皿」『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
 藤澤良祐『中世施陶窯の研究』高志書院 2008年
 『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』大宰府市の文化財第49集 大宰府教育委員会 2000年
 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
 『九州近世陶磁学会10周年記念 九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年

- 2) この皿の内面底部には、二人の髷を結った人物が描かれている。一人は鉄板と鋳で補強された円柱に穿たれた大穴を這ってくぐり、もう一人がそれを眺める様子を描写する。人物が柱の穴をくぐるという情景と、皿の底部側に「大仏」との表記があることから、これが大仏くぐりの様子を描いたものであると推察する。
- 現在、大仏くぐりで著名なのは奈良東大寺であるが、江戸時代においては三十三間堂北に位置した方広寺大仏殿でも行われており、その様子は十返舎一九が著した『東海道中膝栗毛』六巻下（文化4年〔1807〕）の記述や、丹波桃溪画『増字新刻大節用』（寛政13年〔1801〕）の挿絵などから覗うことができる。
- 3) 鈴田由紀夫「磁器の編年」『九州近世陶磁学会10周年記念 九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年 Fig5 - 15
- 4) 平尾政幸・山口 真『平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2005 - 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年 図30 - 253
- 5) 平尾政幸『平安京左京四条三坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006 - 26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年 図63 - 1160
- 6) 瓦は下記文献を参考にした。
- 上村和直「法住寺殿の考古学的検討」『院政期の内裏・大内裏と院御所』平安京・京都研究叢書1 文理閣 2006年
- 千田剛道「平城京の隅木蓋瓦」『奈良国立文化財研究所年報』1999 - 1 奈良国立文化財研究所 1999年
- 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報59冊 奈良国立文化財研究所 2000年
- 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 摂河泉古代寺院研究会・大阪府立弥生文化博物館編『第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け - 11・12世紀の寺院の考古学的研究 -』摂河泉文庫 2001年
- 7) 出口常順・藤沢一夫監修 四天王寺文化財管理室編『四天王寺古瓦聚成』柏書房 1986年 図版II No.167
- 8) 村田治郎・杉山信三・後藤柴三郎「蓮華王院の建築」『三十三間堂』三十三間堂奉賛会 1961年 挿図36
- 今回出土した文字瓦の産地は不明である。これとは別の慶安2年修造時の軒丸瓦には、「摂津国大阪四天王寺藤原朝臣辻村善□□」銘が確認されている（同76頁）。
- 9) 『浅原寺跡』倉敷市埋蔵文化財調査報告1 倉敷市教育委員会 1984年
- 10) 近藤章子『延勝寺・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2014 - 1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所2014年 図24 - 瓦35
- 11) 寺島孝一・片岡 肇編『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告 第13輯 財団法人古代学協会 1984年 第52図 - 23
- 12) 川上 貢・前田義明・鈴木久男ほか『鳥羽離宮跡I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年 HH1C~J型式
- 13) 春成秀爾「明石の古瓦集成2」『発掘された明石の古代展 明石の古代II』発掘された明石の古代展実行委員会 2014年 図版18 - 416

5. まとめ

平安時代後期の遺構は、1区で建物地業、2区では土地造成を確認した。蓮華王院の造営にあたって、調査地周辺で大規模な地盤改良工事が行われたと考えられる¹⁾。建物地業や土地造成の構築土内から出土した遺物の年代が12世紀後半を上限とすることから、史料でわかる創建年代（長寛2年〔1164〕落慶法要）を裏付ける成果と評価できる。

鎌倉時代の遺構には2区のSK214・215・242があり、三十三間堂本堂焼亡（1249）後の瓦の整理土坑と考えられる。13世紀半ばの土師器皿が出土した皿層も、同時期の整地層と考えられる。

江戸時代の遺構は、柵や溝などの区画施設を確認した。1区の区画施設は、本堂中心を境として東西を画するように敷設されている。SA108とSD67の主軸方向が対応関係にあるため、両者は一体の施設である可能性が高い。2区の区画施設は、本堂の西側に敷設されている。ここでも柵と溝（SA270とSD240、SA271とSD241）はセットとして機能していた可能性が高い。区画施設の時期は、出土遺物から17世紀後半前後と考えられる。

以下、平安時代後期の建物地業や江戸時代の区画施設について記述する。

1) 三十三間堂創建期の建物地業・土地造成

今回の調査では、1区と2区の地盤改良工事が異なることが明らかとなった。1区は建物地業、2区は建物の西側をならず土地造成と考えられる。

1区は三十三間堂北隣に位置し、建物の外側に当たる。検出状況から、1区で確認した構築土

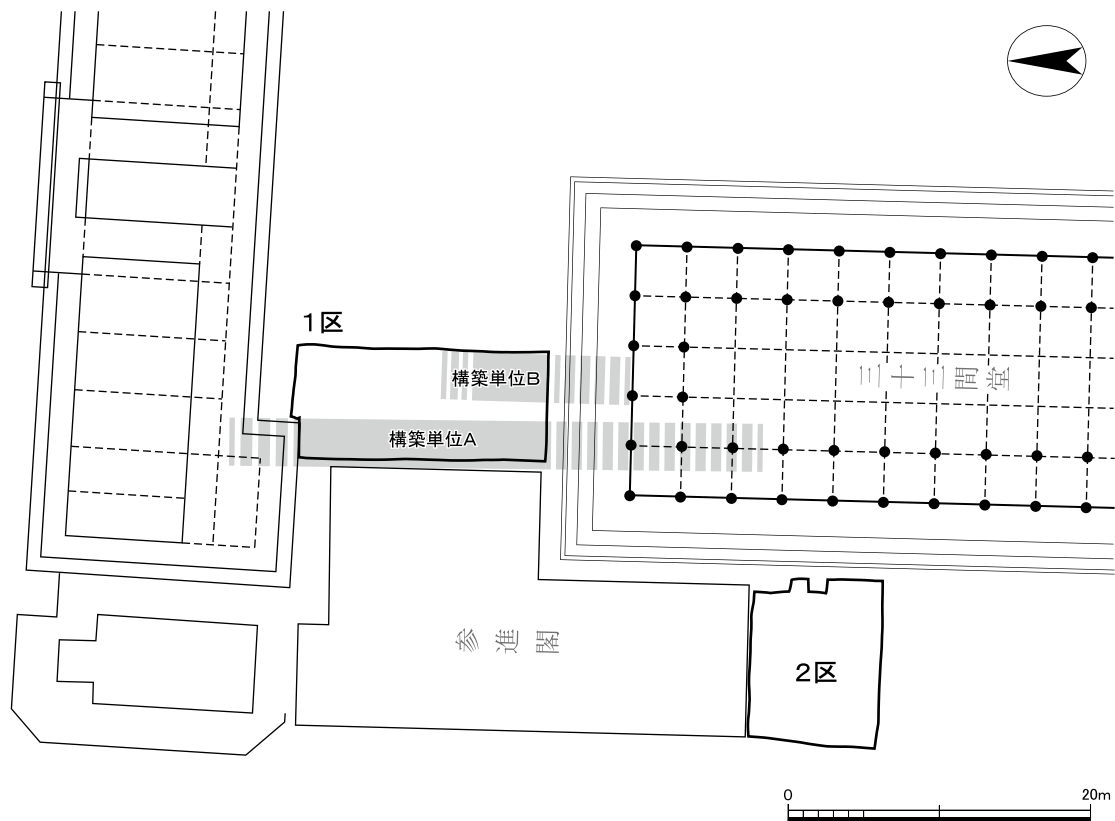


図32 構築単位位置図（1：500）

は、建物本体に連なる建物地業の一部と考えられる。建物地業内からは畝状の構築単位を2箇所検出した。このうち構築単位Aは、幅2.8m、厚さ1.2m、検出長14mに及ぶ²⁾。強固な版築で構築されており、特に縁辺部は灰色泥砂と赤褐色粘土を数cmの厚さで交互に突き固め、一定の高さごとにこぶし大の礫を縁に沿って並べるといふ手の込んだ工法が認められる。縁辺部の土層の堆積状況、礫の並び方³⁾などの状況から、この作業には築地塀を構築する際の工法と同じ、関板を用いた型枠技法が用いられた可能性がある。また、構築単位Aの東側にもこれに準ずる地業が認められる。一方、両構築単位の間は、一層が比較的厚い層序によって埋め立てられており、その違いは明瞭である。

今回検出した構築単位Aは、三十三間堂の西側柱列を延長した部分に当たるため、建物構造と構築単位が連動している可能性が高い(図32)。つまり、加重のかかる柱筋には畝状の構築単位、柱がなく加重のかからない部分には、比較的厚い層序の地業と工法を選択していると考えられる⁴⁾。

一方、2区は1区とは異なり、土層の堆積は東側(建物)から西側に向かって傾斜している。つまり、東側から西側へ順次、埋め立てて土地を造成していることを示している。ただ、こちら側でも基本的には黄褐色系の土と黒褐色・暗褐色系の土を交互に積む工法が用いられている。また、断面観察によれば、礫を多く含む砂泥と礫・砂・シルトを含む砂泥によって土壇状に固められている部分も認められる。

2) 江戸時代の区画施設

江戸時代の三十三間堂は、当時流行した通し矢を行う会場でもあり、方広寺と並ぶ東山の名所として史料に記載され、絵画資料も数多く残されている。今回検出した区画施設について、これら絵画を参照すると、例えば17世紀頃の作と考えられている『紙本金地著色三十三間堂通矢図<六曲屏風>』(国指定重要文化財)に本堂西側の様子が描写されているが、これには周囲に柵などの施設は描かれていない。

しかし、丸山応挙画『三十三間堂図』(18世紀半ば)や歌川豊春画『浮絵和国影跡京都三十三間堂之図』(18世紀後半)、竹原春朝斎画『都名所図会』挿絵(18世紀後半)、丹波桃溪画『増字新刻大節用』挿絵(19世紀初頭)には、本堂の西側に南北方向の竹矢来が描写されている(図33)。

以上のように、18世紀以降の絵画資料には、本堂西側に竹矢来を描写する事例を確認できる。もちろん、当時の絵画は伝聞や模写などを考慮する必要があり、一概に当時の様子を直接示すものとは断言できない⁵⁾。しかし、今回の調査事例をふまえる限り、少なくとも18世紀頃には、同様の施設が本堂西側に敷設されていた可能性が高い。

なお、明治後半から大正にかけての古写真や絵葉書では、本堂西側に柵などの施設は認められないことから、上記施設は本来仮設であったか、恒久的な施設であってもその頃までには撤去されていたと考えられる。

さて、三十三間堂での通し矢の流行は天正年間頃に遡るとされ、17世紀以降は射通した矢数を競う種目が流行する。その最盛期は慶長11年(1606)から寛永10年(1633)、そして万治元年(1658)から延宝3年(1676)であり、射通した矢数を記録した『年代矢数帳』(慶安4年<1651年>序刊)によると、貞享3年(1686)に最高記録が更新されている⁶⁾。

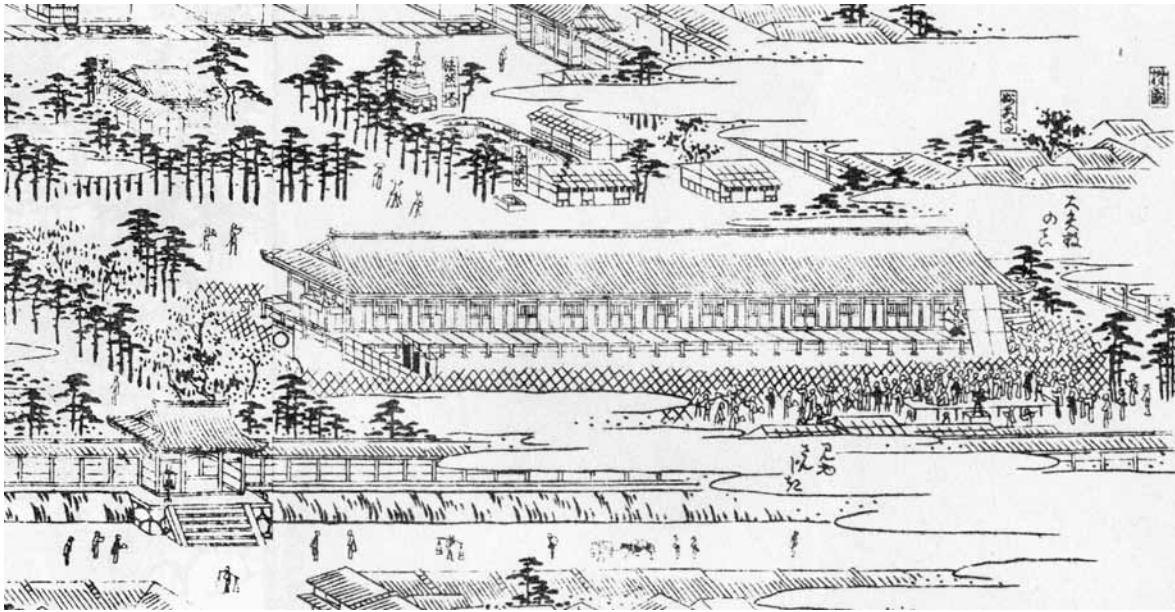


図33 「蓮華王院三十三間堂」(部分)『都名所図会』(『新修京都叢書』第6巻 臨川書店 1967年より転載)

今回、調査で確認された区画施設の時期を17世紀後半と想定したが、これは万治年間以降の通し矢の最盛期から、射通した矢数の最高記録が更新された時期と、ほぼ一致している。また、明治以降は射通した矢数を競う通し矢はほとんど行われなくなるが、その頃にはすでに、これら区画施設が姿を消していたことは既に述べた。今回の調査で確認した区画施設は、その存続時期が通し矢の盛衰とほぼ重なりと指摘できる。

以上の点から、今回検出した区画施設は通し矢と密接に関連する施設であり、それを前提とした構造であったと考えられる。これをふまえると、2区で検出した区画施設の軸方向が、本堂にくらべ大きく西に振っており、結果として区画された場所の占地が本堂北側ほど広がることも、通し矢の競技方法に関係すると予想できる。これは、絵画資料にもあるように、当時三十三間堂の西側が通し矢の会場であり、それを見物する客が多数いたこと。そして、当時の通し矢の射手が本堂南端から北に向かって多数の矢を射たため、見物客を誤射せぬよう、矢の射角を考慮した安全対策であったとも考えられる。

註

- 1) 院政期における軟弱地盤を改良するための地業は、鳥羽離宮や延勝寺、法金剛院、そして法住寺殿域内の最勝光院などで確認されている。京都市内における地業の確認事例は、下記文献にまとめられている。

松吉祐希「まとめ」『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2014-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年

- 2) 構築単位Aの東西幅は、調査終了後、本調査地の隣で実施された文化財保護課立会調査の成果によって確定した。
- 3) 東縁部の石列は、東の小口の面が揃うことから、石の小口を物理的に押さえる構造体が、構築単位の東端に沿って存在した可能性が考えられる。

- 4) 構築単位の構築にあたっては、始めから幅2～3m、高さ1.3mの塀状の構造物を一挙に築いた可能性と、構築単位間の埋土を順次充填しながら、結果的に畝状の構築物として築き上げられた可能性が考えられる。また、構築単位が本堂を越えて北側に構築されていることから、これら単位が建物の重量だけを支える目的で構築されただけでなく、敷地全体の造成土が西側に崩落することを防ぐ構造体であった可能性と、北側にも他の建物が付属していた可能性が考えられる。
- 5) 丸山応挙は現在の京都府亀岡の出身であり、上述の『三十三間堂図』を描いた当時は京都四条通柳馬場の尾張屋中島勘兵衛という玩具商に務めていた。三井寺円満院の祐常門主が遺した『萬誌』には、応挙は写生を重んじ、常に写生帖を持ち歩いていた様子が記述されている。応挙が実際に三十三間堂に足を運び、当時の様子を描写した可能性は高いと考えられる。

佐々木 丞平「円山応挙の絵画論 - 『萬誌』を中心にして -」『研究紀要』3 京都大学文学部美学美術史学研究室 1982年

- 6) 当時の通し矢は、一昼夜に何本射通すかを競う「大矢数」が花形であり、その最高記録は貞享3年(1686)に紀州藩の和佐範遠(大八郎)が記録した8,133本(総矢数13,053本)である。この場合、競技時間を単純に24時間とすると、約122m先の的に対して1分あたり9本弱の矢を放ち、その成功率は62%、残り38%(4,920本)が的を外した計算となる。

今村嘉雄『19世紀における日本体育の研究』不昧堂書店 1967年

付表1 掲載土器一覧表

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
1	土師器	皿	1区	VI層				10	2.5Y8/2 灰白色	V期新
2	須恵器	壺	1区	VI層			6.2	40	N6/0 灰色	I期中
3	縄文土器	鉢	1区	V層				5	7.5YR6/6 橙色	
4	弥生土器	有孔鉢	1区	V層		2.0		50	10YR6/4 にぶい黄橙色	弥生時代後期
5	弥生土器	甗	1区	V層	15.9			13	7.5YR6/4 にぶい橙色	弥生時代後期 近江系
6	緑釉陶器	皿	1区	V層				5	釉:7.5YR6/3 オリーブ黄色 胎土:5Y6/1 灰色	
7	土師器	椀A	1区	V層	15.5	4.3	8.4	14	10YR8/2 灰白色	I期中
8	土師器	皿	1区	III層	7.6	1.3		40	10YR6/4 にぶい黄橙色	VI期中～新
9	土師器	皿	1区	III層	8.4	1.5		90	7.5YR6/4 にぶい橙色	VI期中～新
10	土師器	皿	1区	III層	8.3	1.4		40	10YR6/4 にぶい黄橙色	VI期中～新
11	土師器	皿	1区	III層	9.8	1.7		40	10YR6/4 にぶい黄橙色	VI期中～新
12	土師器	皿	1区	III層	8.7	1.5		40	7.5YR6/4 にぶい橙色	VI期中～新
13	土師器	皿	1区	III層		2.1		5	7.5YR6/4 にぶい橙色	VI期中～新
14	土師器	皿	1区	III層	13.1	2.2		10	10YR6/4 にぶい黄橙色	VI期中～新
15	土師器	皿	1区	III層	13.6	2.3		10	10YR6/4 にぶい黄橙色	VI期中～新
16	瀬戸 色絵	椀	1区	SK49	10.9	5.8	4.5	75	胎土:N8/0 灰白色	
17	土師質土器	手あぶり	1区	SK49			11.0	100	2.5YR5/6 明赤褐色	口縁部外面に菊の浮文 高台内に「楽」の印銘
18	伊万里 染付	椀	1区	SA107	11.1	6.3	4.4	25	胎土:N8/0 灰白色	高台内に「大明年造」の銘款
19	伊万里 染付	八角皿	1区	SA107	15.6	3.2	10.0	25	胎土:N8/0 灰白色	
20	京焼 青磁	三足香炉	1区	SK60	6.6	5.8	5.0	50	胎土:2.5Y7/1 灰白色	底部に「御本山御改」の印刻
21	伊万里 青磁染付	皿	1区	SK60	9.8			20	胎土:N8/0 灰白色	
22	軟質施釉陶器	皿	1区	SK60	12.8	1.5	7.2	8	10YR8/3 浅黄橙色	底部に墨書
23	軟質施釉陶器	皿	1区	SK60	10.6	2.4	5.0	20	化粧土:10YR5/2 灰黄褐色 胎土:10YR6/4 にぶい黄橙色	内面に桐と菊の印刻
24	軟質施釉陶器	皿	1区	SK60	18.6	2.8	11.1	25	7.5YR7/6 橙色	内面:墨絵による人物画 底面:墨書「大仏□ 松篁□」
25	伊万里 染付	椀	1区	SD62	10.7	6.4	4.5	67	胎土:N8/0 灰白色	
26	伊万里 染付	椀	1区	SD62	9.8	5.6	4.3	75	胎土:N8/0 灰白色	
27	京焼 白磁	皿	1区	SD62	9.6			20	胎土:N8/0 灰白色	
28	伊万里	油壺	1区	SD62			5.4	33	胎土:N8/0 灰白色	弥源次窯跡出土品に類例
29	伊万里 青磁	三足香炉	1区	SD62			3.9	70	釉:5GY7/1 明オリーブ灰色 胎土:5Y8/1 灰白色	平安京左京二条二坊十町跡 SE11出土品に類例
30	土師質土器	三足炉	1区	SD62				80	7.5YR7/4 にぶい橙色	平安京左京四条三坊十二町 跡SK23出土品に類例
31	軟質施釉陶器	皿	1区	II層	21.5			20	7.5YR7/6 橙色	口縁部内面に墨絵か
32	軟質施釉陶器	皿	1区	II層	9.8	2.2	4.8	40	釉:2.5Y8/3 淡黄色 胎土:2.5Y8/2 灰白色	底部内面に墨書
33	土師器	皿	2区	IV層	19.8	2.2	14.7	8	5YR7/6 橙色	I期中
34	須恵器	杯	2区	IV層			10.5	25	2.5Y7/1 灰白色	I期中
35	須恵器	甗	2区	IV層	22.2			13	N4/0 灰色	I期中
36	灰釉陶器	壺	2区	IV層			8.6	40	釉:5YR6/2 灰オリーブ色 胎土:2.5Y7/2 灰黄色	東濃・尾張産
37	越州窯系 青磁	椀	2区	IV層				5	釉:7.5YR5/2 灰オリーブ色 胎土:N6/0 灰色	
38	土師器	皿	2区	IV層		1.1		5	10YR7/4 にぶい黄橙色	V期新
39	土師器	皿	2区	IV層	9.7	1.6	5.1	20	2.5Y6/2 灰黄色	V期新
40	土師器	皿	2区	IV層	14.6	2.8	9.7	10	7.5YR6/4 にぶい黄橙色	V期新
41	土師器	皿	2区	IV層	16.7	3.2	11.3	20	10YR7/3 にぶい黄橙色	V期新
42	山茶椀	大椀	2区	SK214			13.6	12	2.5Y7/1 灰白色	藤沢編年尾張4型式
43	土師器	皿	2区	SK242	8.5	1.5	4.8	40	7.5YR6/4 にぶい黄橙色	V期～VI期

付表2 掲載瓦一覧表

遺物No.	種類	文様の特徴	手法の特徴	色調	時期・産地等	備考	出土遺構
44	軒丸瓦	複弁8弁蓮華文。凸形中房、1+6。外区に界線・珠文・圏線。	瓦当成形不明。	N4/0 灰色	平安時代後期～鎌倉時代。四天王寺に同文。		1区掘り下げ、計1点。
45	軒丸瓦	単弁8弁蓮華文。凸形中房、1+6。弁端切り込む。子葉1つ。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。	10YR8/1 灰白色	平安時代後期。山城産。		1区Ⅲ層、計1点。
46	軒丸瓦	右巻き2巴文。頭は離れ、尾は接する。文様上部は盛り上がる。外区に珠文。	瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形。	N3/0 暗灰色	平安時代後期。播磨産。		SK215、計1点。
47	軒丸瓦	左巻き3巴文。頭・尾は離れる。文様上部は平坦。外区に珠文。	瓦当成形不明。	5Y6/1 灰色	平安時代後期。山城産。		SK215、計1点。
48	軒丸瓦	右巻き巴文。頭は連結、尾は離れる。文様上部は平坦。外区に珠文。	瓦当成形不明。	N5/0 灰色	平安時代後期。播磨産。		SK214、計1点。
49	軒丸瓦	右巻き巴文。頭は離れ、尾は接する。文様上部は盛り上がる。外区に珠文。	瓦当成形不明。	N4/0 灰色	江戸時代。		SD62、計1点。
50	軒丸瓦	内区に「慶安三年」銘。	瓦当成形不明。	N5/0 灰色	江戸時代前期。		SK10、計1点。
51	軒平瓦	二重複線格子文。	半折り曲げ成形。	N4/0 灰色	平安時代中期～後期。山城産。		1区Ⅲ層、計1点。
52	軒平瓦	外行唐草文。唐草は連続。唐草の上端が周縁に接する。周縁は素文。	瓦当成形不明。	N3/0 暗灰色	平安時代後期。備前・備中系。浅原寺・延勝寺に同文。		SK215、計1点。
53	軒平瓦	外行唐草文。唐草は陰刻、連続。周縁は素文。	瓦当成形不明。	5YR5/3 にぶい赤褐色	平安時代後期。播磨産。	被熱有	SK214、計1点。
54	軒平瓦	外行唐草文。唐草は陰刻、連続。周縁は素文。	顎貼付成形。	N4/0 灰色	平安時代後期。播磨産。法住寺殿跡に同文。	線刻	SK214、計2点。
55	軒平瓦	外行4転唐草文。唐草は連続。脇は范縮小。	瓦当成形不明。	N7/0 灰白色	平安時代後期。播磨産。		SK215、計1点。
56	軒平瓦	外行唐草文。唐草は連続。脇は范縮小。	瓦当成形不明。	N3/0 暗灰色	平安時代後期。播磨産。鳥羽離宮金剛心院HH1C～J型式。		SK214、計1点。
57	軒平瓦	連珠文。周縁に2重圏線。	包込成形。側面に補足粘土。	N4/0 灰色	平安時代後期。播磨産。神出遺跡に同文。		SK215、計1点。
58	隅木先蓋瓦		茅負に剝形。下面に側板の接合痕。	N5/0 灰色	平安時代後期～鎌倉時代初頭。		SD62、計1点。
59	獅子口瓦	前面・側面に唐草文。前面上部の唐草文は陰刻、下部は陽刻。		N3/0 暗灰色	江戸時代。	中央に釘孔	SK49、計1点。
60	刻印瓦	凸面側に左巻き巴文。頭は離れ、尾は接する。外区に珠文。		10YR6/2 灰黄褐色	平安時代後期。播磨産。	線刻	SK215、計1点。
61	刻印瓦			N3/0 暗灰色	平安時代後期。播磨産。	線刻	SD62、計1点。

付表3 掲載土製品一覧表

遺物No.	器種	器形	地区	遺構名	直径(cm)	器高(cm)	残存(%)	色調	備考
62	土製品	人形土型	1区	Ⅱ層				7.5YR7/4 にぶい橙色	僧の人形型か
63	土製品	泥面子	1区	Ⅱ層	3.1	0.9	100	7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR7/6橙色	図柄:千鳥
64	土製品	泥面子	1区	Ⅱ層	2.9	1.1	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	図柄:鶴

圖 版



1 1区 全景 (北から)



2 SD62・67、SA107 (北から)



3 SK49 (西から)



4 SA108 : SP19 (東から)



1 1区 石列112・114 (北東から)



2 石列114断割断面 (北東から)



3 構築単位A東縁部検出状況 (北東から)



1 1区 建物地業断割南壁断面（北東から）



2 1区 東西攪乱南壁 建物地業断面（北東から）



1 2区 全景 (西から)



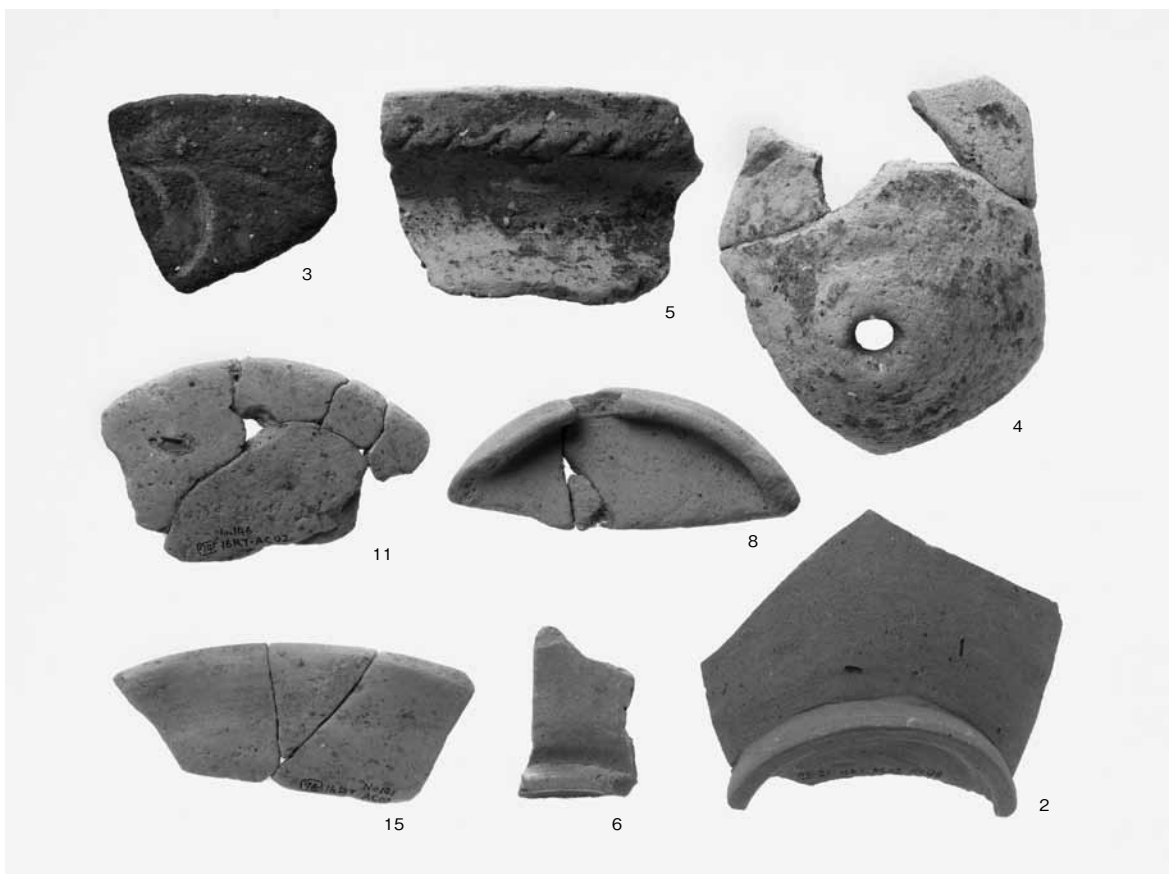
2 SA270 : SP220 (南から)



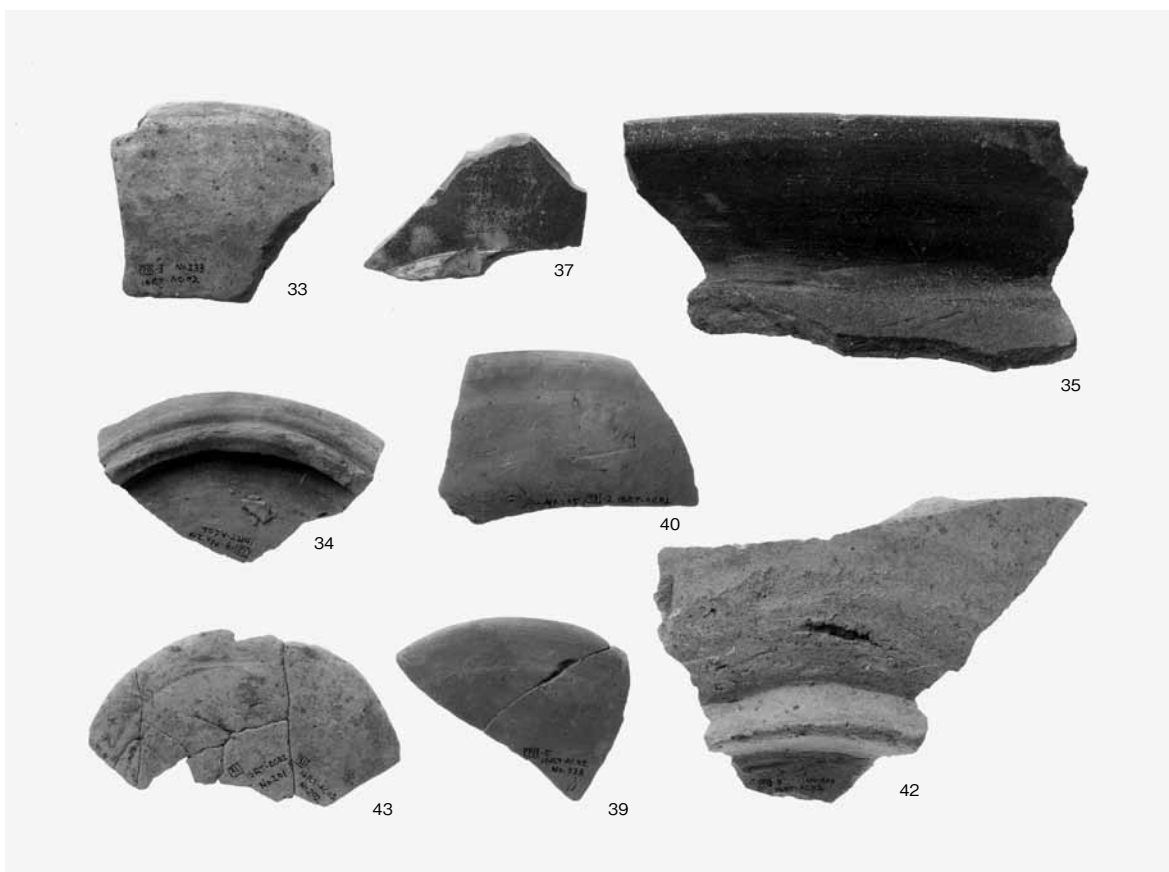
3 SK214・215断面 (南から)



4 2区 南壁断面 (北東から)



1 1区出土土器類1



2 2区出土土器類





44



47



45



48



49



46



50



出土瓦類 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと							
書名	法住寺殿跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-3							
編著者名	中谷正和・松本啓子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 さんじゅうさんげんどうまわ 三十三間堂廻り 642、647	26100	546	34度 59分 19秒	135度 46分 18秒	2016年4月 4日～2016 年5月27日	252㎡	建物建替 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 離宮跡	縄文時代		縄文土器		三十三間堂創建期 の大規模な地業を 確認した。		
		弥生時代		弥生土器				
		平安時代前期		土師器、須恵器、灰釉 陶器、緑釉陶器、輸入 陶磁器				
		平安時代後期	建物地業、土地造 成	土師器、山茶碗、瓦器、 輸入陶磁器、瓦類				
		鎌倉時代	土坑	土師器				
		江戸時代	柱列、溝、土坑、 落込み	土師器、軟質施釉陶器、 焼締陶器、土師質土器、 国産陶磁器、瓦類、土 製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-3

法住寺殿跡

発行日 2016年9月30日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961